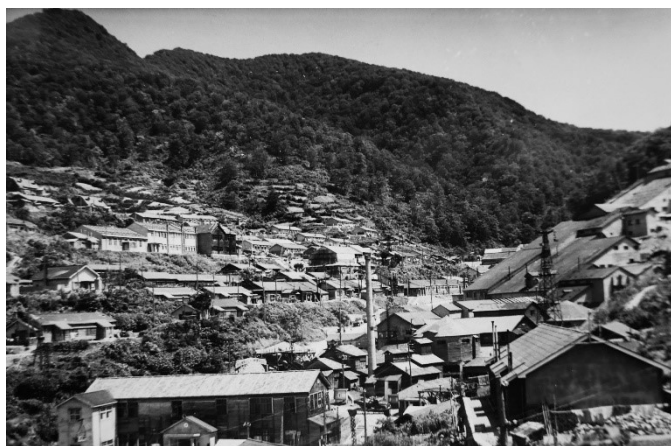


豪雪・緑に覆われる深山に在りて

「上北鉾山の思い出」



上北鉾山の会



# 目次

序 白根澤 亘	1
沿革編	
上北鉦山の沿革 佐藤 宏司	2
探査の変遷～5つの変換点 阿部 喜治	3
採鉦の変遷 小笠原 廣	9
選鉦の変遷 上田 健次	15
寄稿編	
スキーの思い出 阿部 喜治	17
上北鉦山の思い出 有田 哲也	21
ホームページと校歌・校章 安倍 秀勝	27
あの山懐にわが青春が 石川 繁男	31
上北の思い出 上田 健次	33
上北鉦山と私 大橋 恒夫	34
秘境に住んで 小笠原 廣	35
上北鉦山の思い出 掛川 周男	37
学生時代に往き来した上北鉦山 金塚 魁	43
上北鉦山の沢山の思い出 菊池紀子	45
上北鉦山の思い出 曲山 浩	49
上北鉦山の思い出 後藤 正教	51
映画館と上北鉦山 工藤 俊	54
文化の視点から、記憶の断片 佐藤 宏司	57
雪また雪、そしてまた雪 白根澤 亘	59
上北鉦業所休止時の思い出 鈴木 幸男	64
昼の弁当は屋根の上 高砂 和男	67

上北鉾山軌道車等の歴史	高砂 和男	69
私の上北鉾山	高野 栄吉	71
高森部落の思い出	長谷川 勉	72
坪川と子供の頃の思い出	山口 鐵男	78
上北鉾山の思い出	山下 直樹	81
上北鉾山の思い出	山田幸男	83
編集後記	編集委員会	89

## 序

上北鉱山は、昭和 15 年に日本鉱業が本格的に採掘を開始してから 33 年後の昭和 48 年に操業を止めました。鉱量が枯渇したためです。最盛期には 4,000 もの人々が生活していたといわれています。

私ども上北鉱山ゆかりのメンバーが初めて一堂に会したのは、平成 19 年 3 月でした。以来 22、24、25、26 年と回を重ね、この 5 月には 6 回目の集まりを持ちました。去年からメンバーの裾野を広げましたので、第二世代が参加するようになって高齢化に少しブレーキがかかったように思えます。

人であれ物であれ、質量のあるものはいずれ消えていきます。まして有限の地下資源ですから、掘ればなくなるのが道理です。

しかし、同じ場所と時間を共有した思い出は消えません。ヤマの仲間の語り部が消えてしまわないうちに、それぞれの上北鉱山を語って貰い、纏めたのがこの“思い出”の一杯詰まった文集です。

昔を懐かしむだけでなく、次世代に語り繋いでゆく絆となれば幸いです。

白根澤 亘

「上北鉱山の思い出」文集編集委員会代表

# 沿革編

## 上北鉱山の沿革

佐藤 宏司

上北鉱山は、青森県上北郡天間林村天間館（現・上北郡七戸町南天間館 1）に所在し、昭和 11 年 10 月 28 日に、「日本鉱業上北鉱山事務所（のちに上北鉱業所）」になった。

同鉱山は、大正の初年二、三の業者により探鉱が行われたが、本格的な開発は昭和 10 年三井栄一氏の所有になり、本坑硫化鉱床を発見したことに始まる。昭和 11 年 10 月、三井氏の委任により日本鉱業が経営に当たることになった。

その後、本坑に続いて立石、上の沢、奥の沢等で硫化鉱床を発見、本格操業に入った。

昭和 16 年、奥の沢硫化鉱床に接して高品位銅鉱床を発見し、19 年 9 月には月産銅量 1,400 トンを超え、当時本邦最大の銅山になり、「神風銅山」として全国に名を馳せた。

終戦後は、硫化鉄鉱の採掘を再開、23 年上の沢に、25 年立石にそれぞれ含銅硫化鉱床を発見して操業を継続、さらに、30 年代初めには奥の沢で露天掘りによるかつ鉄鉱を採掘し、青森へトラックで搬出した。

選鉱場で処理した精鉱は、鉄索で東北本線の野内貯鉱舎まで約 21 キロメートル搬送し、同所から貨車および貨物船で出荷していた。人員、重量諸物資は、東北本線乙供駅から約 28 キロメートルの軌道を、ガソリンカーで運搬していた。

昭和 30 年代初めには元山—青森間の道路が開通し、33 年 10 月路線バスが田代隧道口～青森駅間 1 日 2 往復で仮運行開始、34 年 7 月元山～田代～筒井～青森駅間 30 キロメートル 2 時間、1 日 3 便の運航が開始された。冬季には鉱山所有の雪上車も運行するようになった。

従業員数は、操業開始時はわずか 50 人だったが、昭和 20 年には 1,485 人、32 年約 1,000 人（同年の鉱山人口約 3,500 人）を数えた。その後は探鉱に努めたが新鉱床発見に至らず、46 年 9 月に坑内採掘を休止、48 年 5 月奥の沢の露天掘りも休止した。

操業開始から閉山までの粗鉱総生産量は約 506 万トン、精鉱中の銅量約 4 万 3,000 トン、亜鉛量約 2 万 3,000 トンであった。

（主に日本鉱業 50 年史・80 年史から）

## 探査の変遷～5つの変換点

阿部 喜治

上北鉱山は大正年間には鉱徴が発見されていたが、昭和 10 年に個人山師の三井栄一氏が探鉱に着手し、昭和 11 年に同氏から日本鉱業が鉱業権を取得して以来、巻初の「上北鉱山の沿革」の項に記されてあるような経過を経た後に、鉱山の宿命である鉱量の枯渇等の要因から昭和 46 年に坑内生産を、48 年には全ての生産を停止した。

この一連の経緯の中で、多くの鉱床や鉱体の探鉱と発見に関わる逸話を含めて、古い資料を網羅整理して本稿を纏めた。

何分にも黴の生えた古文書然の資料に基づき推定の部分も多いが、ご判読願うと共に、上北鉱山は日本鉱業の社是であった「鉱利を全うし遺利を無からしむ」を実践した鉱山と考えている。

本稿の纏めに際しては、山田幸男氏から旧資料の提供等の多大な協力を受けた事に謝意を表す。

## 1. 鉱石の尻尾に触った天間林の人達

東北本線で青森県に入ると、間もなく乙供と言う駅に着く。駅前に貯木場があり、営林署のガソリン車で木材を運んで来るのである。乙供はその起点の駅で、軌道は当初集落のある平坦部を 10 km、次いで人家の全くない大坪川溪谷を西に遡って 18km、分岐点坪川（標高 300m）に着く。

ここから分岐する立石沢を南に遡り、立石、下之沢、中之沢、上之沢を経て標高 700m の奥之沢に至る。この間は落葉広葉樹の樺（ブナ）の原生林で盛夏には緑葉が全面を埋め尽すが、その中に草木の全く育たない不毛の所がある。砂や細かい岩片が地表を覆い、「ガレ」や「ヤケ」と呼ばれている。

中之沢の「ヤケ」は沢の中程 80m の高さにあった傾斜のついた窪地で、淡茶色の砂で覆われていた。天間林村の若者達が露営の支度をし、鶴嘴（つるはし）や鍬（くわ）やスコップを持って乗り込んだ。鶴嘴で孔を掘りスコップで撥ね上げ



るのだが、漏斗状に掘り進むと蟻地獄のように崩れ落ちる。それでも下に行くにつれ暗褐色の褐鉄鉱が多くなる。中央の孔が掘れなくなると打ち留めにして、東西南北にそれぞれ10m 離れて4本掘った。皆同じような結果だったが、山側に掘った孔の底にきらきらと光る物が見えた。改めて他の孔も掘り直してみると同様であった。冬も近かったので、それらを吠（かます）に入れて引き揚げた。

## 2. 救いの神と協同で本坑鉱体を把握

鉱山通でもある三井氏は、それが黄鉄鉱であり、露頭を掴んだことを称賛しつつも、これを本格的に探鉱するには資金と技術を要することを悟り鉱業権を設定した。

昭和10年 掘削設備を整え、露頭の下部70mに本坑0m立入坑を開坑した。堅硬な流紋岩を突き抜けると急に軟い硫化鉄の鉱体に突入した。更に進むには崩落の恐れがあり、支柱が必要であったが掘進は容易であった。鉱体の中を掘り進むこと40m程で再び流紋岩に突き当たった。この間 期待した銅鉱物は発見できず、昭和11年10月 日本鉱業に経営を委ねることとなった。

## 3. 日本鉱業 各所で硫化鉱体を発見

(ア) 本坑鉱体では中心部から立入坑に直角に坑道を展開し、左右とも20mで鉱体を抜け流紋岩に入った。その後とも0m地並での探鉱を進めた結果、鉱体は流紋岩体中に

直径 40m の円形をなすことが分かった。上方へは 70m、下部へは推定で 100m としても巨大な円筒状の鉱体の存在は奇異の感さえある。

- (イ) 立石坑口の急な山腹は大小の岩塊が混ざる「ガレ」である。そこには淡黄色の浸出が見られ地中に硫化鉱の存在が予知された。坑口から 100m で硫化鉱体に着鉱、40m で鉱体を抜け流紋岩となり立入を一時中断した。
- (ウ) 上之沢の地表には数カ所に「ヤケ」が見られた。その中には淡黄色の硫黄分の浸み出しを匂わせる部分もあり、地表からの試錐で数カ所の鉱徴を捉えていた。これらに対して 20m, 40m, 60m, 85m の各地並で 4 つの立入り坑を掘ってそれらを確かめた結果、流紋岩体を下盤とし、その上部の凝灰岩に亘って銅・鉛・亜鉛を含む黒鉱質鉱物の鉱染帯があり、処々に富鉱部をなしていることが分かったが。これらを上之沢第一鉱床と総称している。
- (エ) 奥之沢では、地表下浅い所に凝灰岩、その下には流紋岩があり、ともに強い粘土化作用を受けている。その中に 3 鉱体以上の硫化鉄鉱体を発見している。粘土化作用は鉱化作用とも関係が深いとも言われ、より多くの鉱体の潜在が期待されると同時に、坑内水に胆礬(たんばん)が含まれていることは銅鉱の潜在をも期待させるものであった。



- (ア) 立石坑では 0m 立入坑を更に掘り進めた処、板状に直立する含銅硫化鉄鋳体を発見した。この下部が緩傾斜で肥大するのを試錐で捉え下部への堅坑開削へと繋がった。
- (イ) 上之沢第一鋳床には、流紋岩と凝灰岩の間に銅-鉛-亜鉛を含む鋳物の鋳染帯がみられ、北部～南部にかけて 3カ所に富鋳部を作っている。
- (ウ) 上之沢第二鋳床は地表からの試錐により発見されたもので、東に緩く傾く流紋岩の上の浅海性堆積岩を母岩とするもので、黄鉄鋳-黄銅鋳-閃亜鉛鋳等が角礫質の礫や砂状で含まれる。南北の走向方向 200m、東西の傾斜方向 400m の中に本鑛-上盤鑛等の 5 層の鋳体があり、本坑 0m 坑口から 800m の坑道を掘削して開発された。
- (エ) 上之沢新鋳体は上之沢第二鋳床の北西部の流紋岩の接触部に発達する鋳体で、上部は脈状、中部は塊状、下部は鋳染状である。高品位部には黝銅鋳-閃亜鉛鋳-方鉛鋳が含まれる。
- (オ) 上之沢第四鋳体は試錐により着鋳したものだが、上之沢第二鋳床下盤の流紋岩体の凹部に出来た割れ目に沿って鋳液が上昇して出来たもので、上部が銅-鉛-亜鉛に富む富鋳帯になっている。
- (カ) 上記の諸鋳床-鋳体は浮遊選鋳原鋳として稼採対象となったが、鋳山終末期には、七十森山と石倉の両地区に

集中的な試錐探鉱を実施した結果、成果を得られず探鉱作業を終了した。

## 探鉱の変遷

小笠原 廣

### ・探 鉱

戦時中 神風鉱山と言われ月産銅量で本邦最大の銅山であった上北鉱山も、戦時中の乱掘や施設の荒廃に加え、労働力、資器材の不足等で戦後生産を回復するのは大変であったが、昭和 21 年 5 月には労働組合が結成され、鉱山の操業の基本となる鉱山保安法、金属鉱山等保安規則が 24 年 8 月、25 年 11 月には火薬類取締法が施行されて近代の鉱山の操業に移行していった。

採掘の対象となる鉱床は、立石、本坑、奥の沢にあって夫々の採掘を担当する 3 係と新しい技術の現場試験を担当する技術係の 4 係があった。

係 名	鉱 床	採 掘 法
立 石	塊状硫化鉱	ルーム&ピラー
	脈状銅鉱	シュリンケイジ
本 坑	塊状硫化鉱	ブロックケービング
	層状含銅硫化鉱	ルーム&ピラー
奥の沢	高品位銅鉱	トップスライシング
	塊状硫化鉱	ルーム&ピラー
技 術	新しい技術の開発、導入	

各係の鉱床別の採掘法は、上記の通りであったが、採掘法の説明はさておき、坑内作業の基本は、削岩、発破、積み込み、運搬、支保、レール、パイプの敷設、排水等である。

生産は前記各法令に基づき鉱山の安全、労働環境の改善等を基本に進められて行った。とくに 削岩、積み込み、支柱の作業は、肉体的な負荷がとて大きく大変な労働であった。以下 各作業について如何に安全な作業環境の確立、作業能率の向上が図られていったかに就いて述べよう。

#### ・削 岩

アーム（腕）の着いたコラム（鋼柱）を立てて床と天盤の間に固定し、アームの上にスライドレールの上に乗せた削岩機で削孔する。この削岩機を固定する作業が大変で普通は二人掛りであった。その後 本体の重量を軽減して直接エヤーレグを付けた削岩機が導入され、これが主体になった。この機械は一人で操作でき、便利であったが、長年使っていると振動障害が現れるという欠陥が有ることがわかり、究極的には、人間がハンドルを操作するだけで複数の削岩機を動かせるジャンボに落ち着いて今日に至っている。

削岩には、鑿（たがね）とハンマーが必要で鑿は摩耗した刃先を整形、研磨しなければならず、坑外の鍛冶場でその作業が行われていた。その作業をなくしたのが超合金でできたロッドとデタッチャブルビット（着脱可能な刃先）で、長孔の掘削が可能になり、鑿を持って坑内と坑外を往復することもなくなった。削岩は、湿式化以前は水を使わずに濛々た

る粉塵の中で行われていた。湿式化には水を切羽先端まで持っていく必要があるので、坑内に給水パイプを敷設する必要がありその費用は大変なものであったが、防塵マスクの着用と相まって珪肺（よろけ）の予防に大きな成果があった。湿式化の当初には、特に上向きの削孔の場合、岩粉が水と混ざり泥水となって作業衣を汚すので、嫌がる者もいたが、保安教育の効果で珪肺の怖さも解り湿式削岩は定着していった。

#### ・発 破

削岩機で掘削した発破孔に爆薬を装填して岩石を破碎する作業であるが、雷管に導火線を差し込んで固定し、雷管が入るように銅の棒でダイナマイトに孔をあけ、其の孔に導火線の着いた雷管を挿入する。導火線の長さによって装填された孔で破裂するまでの時間が変わり、その時間差により想定した岩石が破碎されるのである。

点火するには時間がかかり、逃げ遅れないように“ともみちび”という導火線を切ったものに火をつけ、それが燃えきったら退避するという安全策を取るのが一般的であったが、水が出るような湿った切羽では点火に手間取り、破碎に失敗したり、事故に繋がったりすることがあった。それで開発されたのが電気雷管であり、安全な場所に退避してから発破できるようになった。

#### ・積み込み

破碎された鉱石や岩石を鉱車に積み込む作業であるが、合砂（かつさ）と金箕（かなみ）を使って人力で行っていた。

大変な重労働でこれを機械化すれば、どんなに助かるか計り知れない。そんな時、日本の機械メーカーが、圧搾空気でレールの上を移動し、積み込みができるローダーを開発し試験をすることになった。運転に習熟することで過酷な肉体労働から解放されることになったが、仕上がりに多少問題があり、下水溝や側壁（どべら）と底面（ふまえ）の角の部分に破碎物が残り、次の作業をする削岩員から人力による積み込みを懐かしむ声もあったが、積み込みに対する労働力の低減は大変なものであった。このようにローダーの採用は必然であったが、導入の費用が大きく、全切羽に行き渡るのには数年かかった。

ローダーは坑道掘進の切羽に使われたが、スクレーパーは採掘切羽での集鉱に使われた。広い採掘切羽の中で、小型の巻上機のワイヤーにスクレーパーを取り付け、運転者は安全なところにいて鉱石をかき集めるのである。鉱石は直接鉱井に投入されるのが一般的で、ルーム&ピラーの採掘切羽の安全性と生産性は大いに向上した。

#### ・運 搬

破碎された鉱石やズリは、容量約0.4立方mの木製、前開き鉱車に積まれ鉱井まで運ばれるが、木製では耐用命数が短いので、長く使えて一車当たりの容量が増える鉄製の鉱車に代わっていった。また、主要運搬坑道で列車で運ばれる鉱石は、通常使われている回転チップラーから、列車のまま横を通っただけでガイドによって鉱車が横に傾き鉱石が鉱井に



投入されるグランビーカーが使われるようになった。

- レール

切羽での運搬は 6kg/mのレールの上を動く鉦車が使われていたがレールの強度が弱く脱線（バツタ）が多かった。これは復旧のための労力と時間の損失が大きく、切羽での運搬には 9kg/m、運搬坑道には 12kg/mのレールが使われるようになり分岐線の製作やレールの敷設について国鉄のOBを招いて保線員全員に実地教育を行い成果を上げた。

- 支保

軟弱な切羽、坑道には坑木と矢板による支保が行われたが、両側の脚柱の上に笠木を載せて枠が出来上がる。脚柱と笠木の接続部には切り込みを入れて両者がぴったり繋がるようにする。この作業は寸法木と言われる棒状の定規の様なものを使って行われるが、ここが支柱員の腕の見せ所で、仕上がった後を見て驚かされる。

盤圧の強いところでは数日で、末口八寸から1尺（30cm）の坑木が折れてしまう。この様な坑道の加背（高さと幅）を維持するのは大変であった。この状態の対策として採用されたのがコンクリート巻き立てであり、坑道を保守する作業を減らすのに成功した。また、其の中間の支保工として、鋼枠、鉄柱、パイプによる支保も採用された。軟弱な鉦体の採掘にはカッペ（坑道の天盤を支える金属製の梁。相互に連結でき、鉄柱と組み合わせて使用できる）の使用が試みられ成果を上げた。

- ・排 水

昭和 28 年 日本鉱業の各鉱山に先駆けて、タービン・ポンプによる排水の自動運転に成功した。

- ・照 明

坑内の照明はカンテラが主体であったが、キャップランプが使われるようになり、主要な坑道にも電灯がつくようになった。カンテラの反射鏡を磨く楽しみはなくなったが、作業環境の大いなる向上であった。

- ・生産及び原価管理

坑内の各作業の主なものの変転について述べてきたが、原価管理は、戦後間もなくは物品管理に重点が置かれていたのが、その後はだんだんと労務費（作業能率と安全）に重点が置かれていった。即ち、時代が進むにつれて、社員の生活レベルの向上が、物価の上昇をはるかに越して、安全と作業能率の向上を図るのが当然となり、保安と作業能率の向上、肉体的負荷の低減に向かって確実に歩を進めたのである。

坑道掘進は数人がクルーで、一方で削岩、発破の二作業が行われるようになり、削孔長が長くなることで一発破の掘進長も伸びた。採掘では長孔（数メートルから十数メートル）の削孔で、広範囲の鉱石を安全なチャンバー（作業場）での削孔作業で起砕することが可能になり、安全と能率の向上に効果を上げた。

上北鉱山の戦後は昭和 20 年の硫化鉱の採掘から始まり、昭和 33 年の 20,000 t /月をピークとし、加えて、高品位銅

鉍、褐鉄鉍の露天掘りも行っていたが、採掘対象鉍量の枯渇、円高等による金属価格の低迷等により、昭和 46 年 9 月で坑内採掘を休止し、48 年 5 月には露天掘りも終了し、総ての操業を終えた。

ちなみに、昭和 30 年前半に保有していた坑内作業用の機械類は、削岩機：120 台、ローダー：5 台、スクレーパー：6 台であった。

## 選鉍の変遷

上田健次

上北鉍山の選鉍は、昭和 17 年にシグガー及びテーブルによる比重選鉍場の建設に始まり、その後昭和 28 年 3 月に硫化鉄鉍 7,000 トン/月処理の比重選鉍場を、また 11 月に銅鉍 5,000 トン/月処理の浮遊選鉍場をそれぞれ建設し、12,000 トン/月処理の木造傾斜選鉍場が完成した。さらに、昭和 33 年には含銅硫化鉍 11,000 トン/月、硫化鉄鉍 9,000 トン/月、合計 20,000 トン/月の処理を開始した。

しかしながら、その後は鋭意探鉍に努めたが新鉍床を発見できず生産の縮小に至り、昭和 46 年 9 月に坑内採掘作業を中止、昭和 48 年 6 月 露天採掘作業を中止した。

上北鉍山は、もともと奥乃沢鉍床の高品位の直送銅鉍によって始められており、その後本坑や立石坑の坑内掘りの鉍石処理が始まったが、鉍質上分離が難しい鉍石があった。

生産品は、山元から 21 キロメートル離れた野内まで索道で運ばれ、銅精鉱は日立製錬所へ、亜鉛精鉱は三日市製錬所へ、硫化精鉱は当初は社外へ販売されていたが、その後関係会社である苫小牧ケミカルへ運ばれるようになった。

坑内外の採掘休止に伴い、日本鉱業は東北鉱山保安監督部の指導、連携のもと坑廃水処理に人員を常駐させてきたが、平成 13 年 4 月に公益財団法人「資源環境センター」に移管されるとともに、中和処理設備、坑廃水自動化装置、pH 監視装置並びに在宅監視システム等が逐次整備されてきており、今日では坑廃水処理に万全を期していると聞いている。

# 寄稿編

## スキーの思い出

阿部 喜治

### 1. ノルディック 28km走

私が上北に赴任したのは昭和28年、未だ未だ戦後の色が濃く残っている頃で、寮の食事もドンブリー膳から解放されて、食べ放題となったことに喜んでいたものでした。

上北は本州の最北端で不便な所だと聞かされても、福島出身の私にはそれ程とは思われず、冬には7mもの雪が積り、4人乗りの馬橇が1日1往復と聞かされても、独身の私にはそれ程の事ではなく、給料の前借をしてまでも用具を購入する程スキーにのめり込んだものでした。

二冬目の1月11日、祖母の訃報が入って来ました。突然の事でしたので「お正月に逢ったばかりだし、歳ももう八十だしなあ」とぼんやり思いを巡らしていると、課長から声が掛りました。「今夜の夜行列車に乗れ。もう便が無いのでスキーで走れ。斎藤仁君に案内させる。」と否応ない命令でした。28kmの道程を考える暇もありませんでした。

寮に帰って礼装一式をリュックに詰め、スキーを準備していると、斎藤仁君がヘッドライト付きの充電電池を持って現れ、足を痛めないように靴下の履き方などを指導してくれました。真冬の日暮れは早い。新雪の上にクッキリと残っている馬橇のシュプールの上を、左-右-左-右とスキーを滑らせス

ストックを漕ぐ。ヘッドライトが照らす足元のみが明るく、暗闇の中に両側の山が迫った樹々の影さえ見えない静寂の中に、ストックを突く音とスキーの滑る音だけが響いて、檜木平の避難所に着く。小休止にホッと一息ついたが未だ8kmを過ぎたばかりだと言う。

出発、微かながらに月の光もさして、谷も開けたよう。風もなく穏やかな白銀の世界に、樹々の幹だけが光って見える。そして10キロメートル、灯こそ見えないが家々の輪郭が闇の中に微かに見える。上原子の部落だ。未だ8時を過ぎたばかりなのにすっかり寝静まっているようだ。木の株に腰を下ろして小休止。

「あと10km」と檄が入り再出発。広々とした平らな雪の広野を「いち〜にい、いち〜にい」とストックを漕ぐ。煌々と電灯を点ける変電所に文明の明かりを感じつつ、乙供の駅に着いたのは10時に近かったが、夜行列車には間に合いません。

## 2. とんだ八甲田山への日帰り登頂

昭和35年4月、弟が上北にやって来ました。その3年前、大学に合格したのに宿が決まらず困って居た処、日鉱の若竹寮を紹介され学業を終えることが出来そうなのでそのお礼にと言いながら、スキーが目当てなのは見え見えであった。

総務課の事務所に顔を出し、父から預かった品を届けると、後は中之沢のゲレンデでのスキー三昧、滑っては転んではの

数日を過ごしていた。この時期は雪も締まって山スキーには持って来いだ。朝の7時、雪が少し緩み出したようだ。リュックを背にスキーを肩に登る奥之沢への道も少しぬかるんで靴底が雪にめり込んでその分体力を消耗するが、堅々に凍った雪より登り易かった。

奥之沢の峠に着いて一休み、ゴム長を脱いで厚手の靴下とスキー靴に履き替えて、さあ滑降だ、と言っても此処は整備されていない山腹、回轉競技さながらに樹々の間を縫う。田代の平原は広い。この4kmの間に家が3軒見えただけ、でもスキーを滑らせては忽ち突き抜けて、いよいよ八甲田の山裾にとり掛る。今度はシールだ。これから尾根までの8kmは登り道、アザラシの皮をスキーの底に付けて滑り止めにして登るのだ。足に錘を付けているようなもの、青空の下、積った雪は何メートルだろうか。途中、弁当を開き、終りにミカンの缶詰を開ける。供給所でも仲々手に入らない代物だ。そして登り始めて間もなく、苦しいと言って弟が胃の中のを吐き出す。純白の雪の上を鮮やかに染めたのは先程食べたばかりのミカンであった。

疲れたのかなと思ったがゆっくり休む暇はない。ゆっくり登って平らなところに来た。もう大丈夫とシールを外し、平面滑走で付近の道標を探した。そして次の道標を見付けて近づいてハッとした。何と黒いウインドヤッケを着た人が見えるではないか。思わず「どうしたんだ?!」と叫ぶ。「慶応のワンダーフォーゲル部の者だ。今朝酸ヶ湯を出たんだが

帰れなくなったのでビバークしている」。「我々も酸ヶ湯に行くところだ。此処は何回も通った道で、着いたら話して置くよ」と言って滑り出したが次の道標が見当たらない。靄と吹雪の中を捜す一方、来た道を見失っては大変だ。一層頭の中の地図を頼りに谷を下れば酸ヶ湯に着くとは思っていたが、それは余りにも無謀、前進を断念して連中のいる雪洞まで戻る。「我々は早稲田の者だ。暫し休ませてくれないか」と言っても「中に十数名が居て満員だ」と断られ、進退窮まった。そして「上北鉾山に戻り君達の事は伝える」と言って、登って来た道を帰る悔しさ。鬱憤を晴らすように8kmの大滑降、未だ午後の3時前の空は嘘のように青かった。

田代平の滑走は目的を失った惰性で滑るようなもの、途中で日が暮れて奥之沢への登りに掛ろうとすると、ヘッドライトの群に逢う。斎藤仁隊長を先頭に雪上救護隊の面々だ。我々の無事を祝ってくれたのは良いが、これからは訓練で山に登るとばかり行って仕舞う。

後に残されて二人は重いスキーを担いでトボトボと奥之沢に登り、ゴム長に履き替えて凍った道を我が家へ辿る。

10時のニュースでは、酸ヶ湯から十数名と上北から2名の消息が分らないと報じており、慶応チームへの約束が果たせなかったことが残念であると同時に、何時までも遭難者扱いされていることが不満だった。慶応の学生達もその日の夕方には宿に帰り着き、私達も自力で帰宅したのだから・・・。

終り



## 上北鉱山の思い出

有田 哲也

私は、昭和 35 年 5 月までの約 5 年 8 か月間、専ら「倉庫番」として調度課に勤務しました。「上北」は、日立での 4 か月間を除けば、最初の勤務地であり、その間の経験はすべてが新鮮で、いまだに当時を思い出しては感慨に耽る事も多く、「第二の故郷」のような存在です。

今年の 5 月、毎会欠かさず出席して来た 6 回目の上北鉱山の会では、参加人数が回を重ねるごとに少なくなりながらも、当時に懐かしむ多くの方々が参集される様子に接し、益々その思いを強くしています。

その際、「上北の思い出」の冊子を作成してはどうかとの提案があり、記載できるような適切な経験を持ち合せていませんうえに、赴任時から既に 61 年を経過し、甚だしい記憶の忘却に加え多くの錯誤があろうことを考え、躊躇しましたが、この点お許し頂けるものと勝手に解釈し、乏しい記憶を辿ることに致しました。

昭和 29 年 8 月、私は「乙供駅」のホームに立っていました。早速出先事務所を訪ね、到着の報告をすませましたところ、次の発車まで未だ時間があるので暫く休憩するよう指示され、待合室で待機しておりましたら、思いもよらず昼食のサービスを受けることになりました。

ところが、提供された「オカズ」の中に、これまで一度もお

目にかかったことのない代物が添えられており、恐る恐る口にしたところ、猛烈な塩辛さのうえに、強烈な生臭さを感じたため、遂に食することなく食事を済ませました。後日解ったその「代物」は、現在では一般的な食べ物である「筋子」だったのですが、南国生まれの私にとっては、全く、不思議な「代物」でした。

事務所の係員としては、遠来の新人が到着したのを歓迎する意味で、「オモテナシ」の意向を示して下さったのかも知れないに関わらず、その意向を汲み取れない結果になったことは本当に申し訳なかったと思っています。

暫くして、当時入山のための唯一の手段であった「トロッコ列車」に乗り、どのくらいの距離・時間を要したか全く覚えておりませんが、谷間に施設された軌道上を予定どおり運行し「坪川駅」に到着しました。早速、総合事務所に出向き到着挨拶の後、「清交寮」への入室が決定し、晴れて上北郡天間林村の村員となりました。

配属された調度課の事務所は、「本坑」の採鉱課事務所や施設課の近くにあり、「資材の購入・倉庫班」と「林業班」が勤務していましたが、生活用品を調達する「供給班」の勤務は、中の沢にある「供給所」でした。

「購入・倉庫班」の主たる役割は、鉱山で必要とする多くの資材を、必要とする時に供給することにあります。中でも代

表的な物として「削岩機」、「爆薬」、「ザンセート等の各種選鉱剤」がありました。「ダイナマイト」は、野内から「索道」で運搬されたものを受け取り、「立石坑」に通じる道路の斜面に作られていた「火薬庫」に搬入して、採鉱課の係員に引き渡す作業も重要な仕事でした。木箱はかなりの重量があり、運搬は重労働でしたが、檜材で作られた丈夫なものだったので、空き箱を譲り受け本棚として活用させてもらいました。

鉱山としての最終製品である「精鉱」を作るために必要とする「選鉱剤」も、絶対に欠かせない最重要資材でしたが、その残高と使用実績を把握するため、「索道」の発着点である運輸課の事務所に接続した斜面に作られていた「選鉱場」の場内をよく上下したものです。

調度課事務所の建物は、事務室と倉庫が一体となっており、多くの削岩機部品のほか、各種の資材を保管しており、「払出伝票による出庫」に備えていました。物品の補充は、青森で調達できるもの以外は全て資材部を通じての「本社購買」に依っていました。通常は「購入依頼書」を郵送しますが、緊急の場合など重要な用件がある場合には、「電話交換室」に接続を依頼し、繋がり次第初めて通話ができる時代でした。

上北勤務の最初の 2 年弱は、「専門実習」の期間でもありましたが、その終了時に「実習レポート」を提出する必要があり、「WP」や「PC」など無い時代、なんとか完成した原稿を冊子に纏めるのが一苦勞でしたが、「ガリ判刷り」が得意な方が引き受けて下さり、大変助かった記憶があり感謝しています。

「林業班」の主たる役割は、寒い冬を乗り切るために欠かせない暖房用の燃料を確保することでした。営林署から伐採の許可を得て、「ブナ林」から切り出した木材を、使い易い大きさに切り揃えて所定の数量に纏めた一山を「一棚」と呼び、何棚かを各家庭に配給する大変苦勞な作業を受け持っておられました。寒い冬にはこれらの方々とその薪を燃やす「ダルマストーブ」を囲み、アルマイト製の弁当箱で温めた昼食を食べるのが楽しみだったのを懐かしく思い出します。

格別の娯楽機関など無かったヤマでの楽しみの一つに「会館」で時々上映される映画や演劇があり、都度出掛けていましたが、鋸で音楽を奏でる一行や、後日売り出した若手の俳優が來館したことがあったような気がします。

清交寮では、時々「飲み会」を開く機会がありましたが、「ヤカン」で沸かした日本酒を、「オチョコ」ではなく、蛇の目マークの入った「湯のみ茶碗」で酌み交わす豪快な宴会となることが常で、かなり鍛えられたものです。

また、当時総務課の係長だった竹本さんの指導で寮生数人と共に練習する尺八の会がありました。千葉さんなどは練習熱心で優秀な生徒でしたが、私はなかなか音が出せず、楽しみよりも苦しみの方が上回る状態の劣等生でした。それでも本社転勤時、連絡を受けて待ち構えていた同好会の方に押し切られたかたちで「羽織ハカマ」を着せられ、東京駅近くでの発表会で一員として参加させられる羽目になり、最後列で冷や汗をかいた

思い出が残っています。

船川勤務中、一時増設の構想が持ち上がり、結果的には「石油備蓄会社」が利用する事となった埋立地の漁業交渉の際、竹本所長の下で参画することとなったのは印象的です。千葉さんには後日、今では解体された国立競技場のトレセンで良くお見掛けしましたが、昨年他界され、お別れ会では、寮でよく歌っていた「スキーの歌」を合唱してご冥福を祈りました。

休日、近くの山を散策するのも楽しみでしたが、初夏を迎える頃、決まってひどい「ウルシ負け」の被害に遭ったのには閉口しました。それでも、秋、茸採りの名人に先導され、見事なナメコが密生した「風倒木」を発見した時の感激は、忘れ得ない思い出です。

楽しみの最大のものは、何と言っても冬期間のスキーでした。県内でも有数の豪雪地帯だけに冬の到来も早く、9月30日に初雪を見たのを鮮明に覚えています。

積雪量も半端でなく、供給所に入るとき、通常は道路から何段かの階段を登るところを逆に滑り降りる程でしたので、好天時の昼休み、滑降に適当な斜面を見つけるのに苦労はありませんでした。整備されたグレンデとは違って、立ち木の間をすり抜けることが必要で、恰好よりも転倒防止が最優先でした。

ある日、手袋を嵌めず素手で滑降中にスキーのエッジで手に大怪我をし、近くにあった医院で処置を受ける失敗を冒しまし

た。

失敗と言えば、坑内見学をした時、興味半分に豎坑内部をカンテラで照らしながら覗いていたところに、上部から急にケージが降下し、慌てて首をひっ込めたので、辛うじて事無きを得ましたが、自己保全の大切さを教えてくれた貴重な体験の「ヒヤリハット」でした。

5月の連休を利用して八甲田山を目指すスキー登山も、当然ながら慎重に進める必要があり、5回ともベテランリーダーのもと、弘前歩兵連隊の雪中行軍で有名な田代平にあった「ダム監視小屋」に前夜から一泊し、早朝天候状況を確認してから出発するのが習わしでした。

酸ヶ湯温泉に向けシールを着けての登山はかなりキツイものでしたが、到着後の「仙人風呂」とビールへの期待の方が上回っていました。当時酸ヶ湯には「鹿内仙人」と呼ばれた老人が健在でしたし、三浦選手親子も合宿に訪れていたようです。

帰りは雄大な前岳の斜面を、木々をかわしながら、一気に滑り降りる壮快感を味わうのが楽しみでしたが、天候の急変には勝てず、出発後やむなく引き返したこともありました。

上北には国体選手級の指導員がおられ、技能検定を受験したところ、幸いにも3級のバッジを頂けたのは感激でした。後日水島転勤時、第1回倉敷市市民スキー大会に、上北出身者4人で団体競技に参加し、何とか転倒せずにゴールできたため、優勝旗を受け取ったのは嬉しい思い出です。

船川勤務となった昭和45年の夏、懐かしさのあまり家族4人で上北を訪れました。数名の方が閉山のための多忙な整理作業中でしたが暖かく歓迎して下さり、感激でした。ただ、長年過ごした「清交寮」の建物は傾き、面影を残すのみとなっていたのを目にした時は、鉱山の宿命とは言え寂しい限りでした。

上北在勤中は、東北本線の列車を見るのも1年に一度か二度程度でしたが、「上北の沈澱銅」に象徴され、「神風鉱山」と呼ばれた上北で多感な独身時代を過ごさせて頂いたことを誇りにおもいつつ、当時を懐かしむ今日この頃です。

平成27年8月 記

## ホームページと校歌・校章

安倍 秀勝

### ホームページ

小学校同期会の葉書が、郵便受けに投函された。上北鉱山を離れて20年、当時38歳の秋である。

待ち合わせ場所は東京上野、西郷隆盛の銅像の下と記されている。

葉書を見ながら上北鉱山で暮らした思い出の記憶が、雪景色や紅葉に彩られ、蘇って来る。

当日集まったメンバーは18名。懐かしい同級生の再会と共に、思い出話に華が咲き、酔いが回る。そして、締めは校歌斉唱である。幹事が用意したメモを片手に、忘れかけた

歌詞が酒の勢いで盛り上がる。

まだ携帯電話やパソコンの無い時代である。その後、十数年を経て我が家にもパソコンが入り、携帯電話も当たり前の時代となる。

多種多様のインフラが整備され、世の中もデジタル社会に急速に移行していく。物珍しいものに直ぐに飛びつく性格は、父親譲りかも知れない。パソコンを自作して、面白半分「上北鉦山」と称したホームページを作ることになった。

当初はページ数も少なく内容も乏しいものだったが、掲示板を加えて、とりあえずホームページらしく完成。知人を通じて、湯浅さんの兄さんが「上北ニュース」の原本を創刊号から所持していると聞き、原本を借りして、ホームページに追加する事となった。

原本はかなり劣化していて、新聞よりかなり小さいがB4サイズである。ホームページに取り込むには、A4サイズに縮小コピーしてさらにスキャナーで取り込み、画像データで保存しなければならない。

けっこう、これが大変な作業である。時間がかかるし、なにしろ 364 枚の膨大な資料のデジタル化である。

取り込んで見ると、創刊号から第 114 号の内容には、所々欠落しているページが見つかった。少し残念だなと思っていたところへ、掲示板を見て思いがけない人からメールが届く。

その方は、この創刊号を編集したメンバーの一人、故和田山善之様からであった。その当時の「上北ニュース」の原本



を、今でも大切に保存しているとの事。早速資料を拝借し、湯浅さんの欠落部分は和田山様の資料で補填され、「上北ニュース」はほぼ再現する事に成功するのである。

和田山様からは、この当時編集に使われた膨大な写真集も所持していて、この写真も活用して下さいとの嬉しい応援。また、湯浅さんは、恩師高見先生の影響で音楽活動に従事していたようで、小学校と中学校校歌の演奏曲をMDに書き込み、送ってくれました。この事で、ホームページに湯浅さんのバックミュージックが流れる事となった。

掲示板に、たくさんの鉾山関係者からの投稿が寄せられ、思いがけない繋がりが増え、上野で再会した小さな出会いが横軸となり、今世代を超えて大きな縦軸に結びついた感が致します。

今後も末長く、上北鉾山ホームページを運営していきますので、皆様の応援宜しくお願い致します。

## **校歌と校章 急がれた校歌制定**

(以下の内容は、竹内敏夫先生から岩崎繁様に送られた手紙から抜粋したものです。)

6年生の修学旅行。函館から大沼公園へ行く途中のバス車内での事である。子供たちは、早朝からガソリンカーに揺られ疲れてコックリ、コックリ。

ガイド嬢「ここで、皆さんの学校の校歌を聞かせて下さい」車内「シーン」。我が上北鉾山小学校には、学校のシンボル

でもある校歌というものが無い。

言いようのない痛撃を食らってしまった。児童たちこそ、校歌のなんたるかも知らないのである。

やがて、すーと立ったK先生「さあ元気にうたうぞ！！」  
「♪ はれた おそらに チョウチョがとんで・・・・・・・・それっ」

子供たちがもっとも歌えるのが、この歌であった。当時、ラジオではやっていた童謡、朝礼の時全児童が合唱していたものである。

ガイド嬢「大変、元気のいい、校歌でした」。

この時同乗していた米田勇四郎校長、校歌を持たない「みじめさ」を、身にしみて味わってしまったのである。それから、校歌制定のため米田校長自ら奔走しはじめたのは、当然の事である。

作詞は小野正文先生、作曲は校長同郷のよしみをもって南啓喜先生に依頼したと思われる。正に与えられた校歌では無く、学校一丸となって、必要にせまられて制定された校歌であった。

されば、校旗樹立を願うのは当然の事であった。しかし、またしても校章が無い。校長に頼まれ、自分が（竹内敏夫先生）が草案することとなる。

あれこれ、知恵を絞っての作品であるが、意とする事はこの様な事である。

岩を蹴って飛び上がる英知ある若鷹を図案化し、胴体を

「ペン」にして勉学に励む志を。

荒鷲が岩を蹴っている足で、小学校の「小」を型どおり、大空へ向かって羽ばたく願いを込めている。

バックの円は、日本鉱業のシンボルマークを取り入れた。



右の図案は、竹内敏夫先生、本人の自筆である。

## あの山懐にわが青春が

石川 繁男

「かみきた」という語句には、懐かしさと快い響きがある。

そして、ぶなの緑に覆われて、山内を縦走する坂道を、高森山と折紙山に挟まれた山峡が臉に蘇るのである。

選鉱場の大きな屋根、カラカラとなる鉄索の音、空を行き交う搬器の姿、供給所に往き来する人の流れ、山腹に並んだ赤い屋根の社宅の棟々、冬は灯りが雪に映えて幻想的な光景を見せてくれた。

風景画の好きな私は、奥の沢から見おろす野辺地湾と下北

半島の眺めに、いつも立止まったものである。また、田代平から望む残雪の八甲田山と秋の紅葉も忘れがたい。

戦争に敗れ、その年の12月半ば過ぎ、千曳から雪道を一日がかりで歩いて鉾山に入った。それが上北への第一歩であった。職場は工作の鉄工場で、機械の運転や整備補修などの仕事を経験した後、労働組合の専従役員になり、多くの人々と接触して、貴重な人生経験を積むことができた。

独身時代の寮生活が長く、そこは地元をはじめ各地の方言が飛び交い、「まいねえ、まいねえ」と言いながら始終賑やかだった。戦後暫くの間は酒のない時代で、ドブロクを入手してきては酒税反対闘争と称して飲み交わし、時局を論じ、文学や人生を語り、放歌高吟する日々を送っていた。その仲間たちも、大方は天の風になってしまい、寂しい限りである。折にふれては思い出すあの顔、あの声。

しかし、呑んでばかりいたわけではなく、文化活動にも大分かわった。演劇では何回も舞台を踏んだし、舞台監督も務め、県の文化祭にも参加した。劇場のステージで独唱したことも2、3回あった。高校の学習、同好会の仲間との文芸誌の刊行、コーラス、ダンスも習った。運動会では、いつもリレーの選手としてアンカーを務めた。鉾山の一大イベント山神祭では神輿も担いだし、盆踊りの太鼓に合わせて夜遅くまで踊った。山の夜は涼しく、蚊のいない平和の郷で、まさ

に天国だった。

こうして、あらゆるものに若さのエネルギーを注ぎ込んだわが人生の炎の時代だった。

鉾山には、きれいな女性が多く、いつも胸をときめかせていた。しかし、みな片想いで失恋の悲哀を味わっては溜息をつき、夜空の星を仰いで嘆いていた若い時代。すべてが川の流れるように過ぎ去って、私の青春時代は、かつて三千六百の人が暮らしたあの山懐に包み込まれている。

昨今、絆という言葉がよく使われるが、同じ職場や環境で苦楽を共にした上北の仲間には本当の絆を感じるのである。

思い出は尽きない美わしの山よ

愛しの上北よ、いつまでもわが心に。

## 上北の思い出

上田 健次

私が上北に赴任したのは、昭和44年2月でした。千曳からの雪上車での赴任で、関西育ちの私にとっては、豪雪は初めてで、びっくりすることばかりでした。

最初の頃は、とんでもない所に来たもんだと思いましたが、しかし、5月の融雪時の新緑の美しさは、目を見張る素晴らしいものでした。また、春の山菜、秋のキノコも天然の味の美味しさに感動しました。

数ある思い出の一つに、組合活動があります。転勤1年後に止むを得ず執行委員の選挙に出ることになり、無事当選しましたが、その後すぐに閉山の話があり、組合としても対応に追われました。入社4年目の私にとっては、その後の人生にとって貴重な経験を得ることができました。

上北は、私には第二の故郷ともいえる所で、折にふれて思い出しています。

## 上北鉱山と私

大橋 恒夫

私が上北鉱山に赴任したのは、昭和43年1月3日です。年末ザイールから帰国し、夏の世界から、冬の世界へと移り住みました。野辺地から雪上車に揺られ、家族4人、2人の幼い娘を連れての赴任でした。

上北には、閉山まで勤務しました。あつと言う間の4年間でしたが、今振り返ると充実した4年間だったと思います。

当時の上北は奥の沢、上の沢、本校、立石で採掘が行われており、最盛期の力はなかったものの、活気に満ちていました。また、堂の沢の新鉱体への着鉱も間じかでした。

所長西宮、採鉱中村、探査石井さん等が居られました。しかしその後、堂の沢は期待した鉱体は発見できませんでした。また、坑内外での試掘でも新しい鉱体を発見することが出来ませんでした。このため既存の鉱体を採掘するのみとなり、

閉山へと向かって行きました。

探査に勤務していた私は、坑内外の探鉱にかかわり、鉱体の発見に努めましたが、成果を上げることができませんでした。

閉山前、私はインドネシアのニッケル調査に出たため、家族を残しゲベ島へ出張しました。そのため帰国した時は、上北は閉山されており、上北に戻ることなく、豊羽へ転勤しました。

上北の生活、冬は大変厳しいものでしたが、雪の晴れ間には社宅の前で、子供達とソリ遊びを楽しみました。また、春、夏、秋と移り行く季節の山々の姿は、忘れることが出来ません。特に、上北に入る峠から見る八甲田連峰や田代平の紅葉の世界は素晴らしい眺めでした。また行ってみたいと思っています。

## 秘境に住んで

小笠原 廣

自然が大好きである。

昭和27年初夏、同僚とともに乙供の出張所前から上北鉱山行のトロッコ電車に乗ってから、昭和35年の春に転出するまで、約8年に亙る北の大自然の中での生活が始まった。社会人としての第一歩であり、3年余りの寮での独身生活、そして結婚、二人の娘に恵まれてやっと一人前になった。も

う60年近く前のことだが、上北は本当に懐かしい。

1年のうち5か月余りが冬という気候であり、スキーが苦手の私は、冬は専ら室内で時間を過ごしていたが、マージャン、囲碁のほかに、薪ストーブの周りでの駄弁りも楽しかった。たまに社宅に呼ばれて、鳥のすき焼きを御馳走になり、前に勤務していたほかの鉱山でのことを聞くのは興味深く面白かった。残念なことに、その頃はお酒が極端に弱く、そのうちに寝てしまい、気が付いたら誰もいなく、ストーブの部屋で毛布を掛けられており、家の人に気付かれないようにソーと抜け出して寮に戻ったことが何回かある。あの頃お世話になった人々は、もう皆いない。

冬、吹雪もあれば晴天もある。晴天の朝、新雪が朝日にきらめき木々には雪の花が咲き、雪面には点々と小動物の足跡が見え、それがフット消える。こんな風景はここでしか見られないと思った。社宅への帰り道、傍らの雪の中に身を投げしてみる、人型の窪みが出来て天から限りなく雪が降ってくる。酔いの故もあって、そのまま眠りたくなった。

春、残雪の中に「こぶし」の花が咲き、「まんさく」の黄色い花が見え、そのうちに「ぶな」の新緑が全山を覆い、山菜の季節がやってくる。わらび、ぜんまい、みづ、うど、しどけ、たけのこなどそれぞれ独特の風味があって大好きだ。長女を背負って皆と田代平につつじを見ながらワラビ取りに行ったのも、いい思い出である。

夏、いわなの夜突きやぐだり沼での釣りの話が出てくると、



もう夏である。各部の活動も盛んで、狭いグラウンドも行事が絶えることがない。8月のお盆がすむと秋風が吹く。

秋、「うるし」や「ななかまど」の葉が色づき始め、紅葉がはじまる。昭和58年ごろ十和田、奥入瀬を通して鉾山に行ったことがある。天気にも恵まれ紅葉は素晴らしかった。中でも、上北鉾山の紅葉は群を抜いて美しかった。こんな良いところに住んでいたのか、と、家内とつくづく話し合ったものである。

秋はキノコの季節である。わかおい、ぼりぼり、なめこ、まいたけ、など種類はまだまだ沢山あるが、自分で採ったものは数種類で、あとは貰い物が多かった。ぼりぼりの味噌汁、まいたけのバター炒め、網焼き、とても美味しく、今市場に出ているキノコはキノコの滓である。

何の不自由もない秘境に住めたなんて、鉾山での暮らしは素晴らしかった。

## 上北鉾山の思い出

掛川 周男

昭和33(1958)年4月に日本鉾業(株)に入社し、本社と日立鉾山での総合実習を終えて、専門実習で上北鉾山に赴任したのは真夏の8月でした。

乙供駅から営林署の森林軌道に乗って坪川に着いたのは学生時代に見聞した鉾山とは異なって深山幽谷の山の中で

したが、その頃東京でも都営アパート等で漸く建ち始めた鉄筋三階建てのアパート社宅があるのを見て一寸驚き安心した記憶があります。

その後、昭和 35 年 3 月に実習が明けて当時の木戸が沢鉦山に赴任するまでの二冬を挟む僅か一年八ヶ月の間でしたが、上北鉦山にはお世話になりました。

何しろ社会人一年生にとって初めて触れた上北鉦山の「一山一家」の社会から受けた強烈なインパクトはその後の長い人生の原点となりました。

独身寮生活で社宅の方には縁が無く、家族持ちの社宅での生活に触れる機会はあまりありませんでしたが、供給所・立石の食堂・劇場・病院等々、中就く、当時配属されてお世話になった探査課の皆さんや、先輩達からかなりイビラれた？清交寮の同宿の皆さん達との活気に満ちた生活を懐かしく思い出します。

探査課に配属されたと言っても、何も知らない青二才ですから、専門実習テーマとして「上の沢第二鉦体の賦存と石英粗面岩底盤の関係」を与えられたまま放っておかれたため、毎日好き勝手に探査課の皆さんの尻に付いて奥ノ沢、上ノ沢、本鉦、立石の各鉦体の坑内測量や調査を見習ったり、ボーリングの親方の岡村佐太郎さんのお尻にくっついて坑外現場を回って岩芯を調査しながらテーマ論文の材料を集めたり

しているうちにアッとと言う間に一年八カ月が過ぎてしまいました。

岡村さんには良く山菜やキノコの見分け方や採り方を教えて貰ったり現場で昼食の弁当時に犬肉鍋を食べさせて貰ったこともありました。岡村さんから伝授の現場廻りのキノコ採りに熱中し、肝心の調査研究より面白く、ナメコや俗称ボリボリを沢山試料袋に入れて寮の付加食材として持ち帰って、賄いのおばさんに面倒臭がられたものです。

上北鉦山と言え先ず思い出すのは雪で、赴任した昭和33年の冬は未曾有の豪雪で、鉦山事務所の前の広場の積雪が4m程で2階の窓下まであり、寮も屋根まで埋まって、先輩に新人の伝統義務だと叱咤されて、嫌々寮の屋根の雪下ろしや窓の雪掻きをさせられたのもほろ苦い思い出です。

冬の積雪季の坑外現場廻りはスキーを履いてですが、これも岡村さんに指導を受けました。雪が降る前に青森市でスキー道具や服装を一式買って来て、現場廻りの朝はボーリングの詰め所でワックスの塗り方を教えて貰ったものです。

当時の探査課には救護隊の斎藤仁さん、ボーリング組には指導員の資格を持った最上(光彦)さん達がいて、昭和34年12月の全山スキー大会では優勝しましたが、私も補欠選手の一人としてその一翼を担う光栄を得ました。



左から  
阿部喜治さん  
底田治三郎さん  
小松政夫さん  
岡村佐太郎さん  
斎藤仁さん  
掛川

蛇足ですが、後年私が南米チリーでの鉱山調査に従事した折に、最上光彦さんが長期出張でボーリングを担当してくれましたが、日本では真夏の8月（チリーでは真冬）に、休暇としてアンデス山中の有名な Portillo 国際スキー場へ帯同して滑って貰ったこともありました。

また、斎藤仁さんに勧められて、救護隊の冬期訓練の八甲田山-田代平横断、酸ヶ湯温泉への一泊遠足の尻に付いて参加したこともありましたが、固定ビンディング靴のための靴ずれに悩まされながらも、樹氷林を進む爽快さや今も変わっていないと言われる鄙びた温泉の千人風呂、に加えて当時名物ガイドだった鹿内仙人と写真を撮ったりしたことも忘れられない思い出です。

## 樹氷林を酸ヶ湯に向けて



## 当時の酸ヶ湯温泉の鹿内仙人と建物



また、当時大相撲の時期になると青森市に勧進元のある星取り協会に会費を払うと翌日の取組票が配られ、勝敗予想を返送し、成績が良いと場所後に商品が貰える遊びがあり、四股名を実習テーマから“粗面岩”と名乗って、毎夕方紫雲寮のカウンターに同好者が集まり、未だ山内に少なかったテレビを囲んで和田山善之さん達とワイワイ言いながら相撲中継を見たものでした。たまたま星取りが好成績で関脇のタイトルと商品を貰った記憶があります。

東北山中の大自然の中にある上北鉾山一帯の山野を歩き

る事が出来たお陰で、緑ひたたり山菜に富む夏、急速に色づく紅葉とキノコの秋、白一色の雪の冬、湿地の雪解けの中に咲き出す水芭蕉や山裾のこぶしの花の春、等々の明確な自然の四季を体験したのも貴重なことでした。

今、改めて振り返ると沢山の記憶の断片が走馬灯のように頭の中でグルグル回り出して切りがありませんが、昭和 35 年の 3 月末に実習が明けて栃木県の木戸が沢鉦山へ転勤となりました。

この冬は積雪が比較的になかったため、本社へ転勤の白根沢亘さんと共に事務所前で森沢一平所長の万歳三唱で皆さんに見送られて雪上車で奥の沢越えで青森に向いました。途中で雪の状態が悪くて引き返す話もありましたが、万歳三唱の手前恰好悪く、無理やりに何とか青森に着きました。

夜行列車で仙台で白根沢さんと別れて東北線の矢板駅に着き、前年上北から転勤で来ていた敷波博さんの出迎えを受けて事務所に着きましたが、同鉦山は関東平野の水田地帯の縁辺にあり、裏作の麦畑が青々と広がっている中の未舗装の矢板街道を走った砂埃りで一張羅の紺の背広が真っ白になって、雪の上北から一晩で別世界に来た感じでした。

その後、67歳で旧日本鉦業（株）を完全リタイアするまで、国内では栃木県日光鉦山・福島県田代鉦山の外は殆ど日

鉦探開(株)での海外勤務と出張業務でしたが、国内外の何処に居ても、相手は外国人をも問わず、長年恙無く仕事や生活が出来たのは、上北鉦山で身に付いた一山一家に始まるチーム意識が常に潜在していたお陰と思っています。

時代の推移と共に社会情勢や人の考えも大きく様変わりして、古い人間の古い考えは最早通用せず、しかも上北で足腰を鍛えたのにも拘わらず加齢とともに脊柱管狭窄症で歩行もままならぬ老残の身ですが、去ってから55年を経た今日でも上北鉦山に関わる人達との絆だけは大事にしたいと「上北鉦山の会」にしがみついている次第です。幸い上北生まれ上北育ちの次世代の方々が参加してくれて嬉しく思っています。

## 学生時代に往き来した上北鉦山

金塚 魁

私が大学2年の昭和42年、父は本社から上北鉦山に転勤となった。このため留学生及び子弟の寮であった若竹寮に入寮することとなった。親と離れての生活に一抹の不安はあったが、むしろ親の監視の目からはずれることへの期待が大きかったことを覚えている。友人や娯楽もない上北は必ずしも魅力的ではなかったが、せめて夏休みや正月ぐらいは親に安心してもらおうと行ったものである。父が乗車券を手配(今

思えば親心に感謝)してくれた寝台列車の「ゆうづる」や「はくつる」で12時間近くかけながら、上北まで辿り着いた。夏の帰京の折は、下北半島の恐山や仏ヶ浦などに立ち寄りして、半ば旅行気分であったことも上北に向かわせたのかも知れない。

夏は避暑地に来たようで快適だったが、冬はとにかく想像以上に大変だった。山の斜面の社宅は、豪雪にすっぽり埋まり、昼でも夜のように暗く、電燈を点した生活だった。居間には薪ストーブが常に燃え、母はストーブの上に鍋を載せ、コンロ代わりに煮炊きに利用していた。物置には一冬過ごせるための燃料の薪がうず高く積み上げられていた。吹雪いた翌朝は出入り口の扉がなかなか開かず、何とかこじ開けて、社宅の前の雪掻きをさせられたことも懐かしい。冬はまさに陸の孤島、鉱石を野内に搬出する鉄索の戻りに生活物資が搬入され、これが社員家族の命綱だった。当時この鉄索が故障で遮断にでもなったらどうなるのだろうと思うとゾッとした思いがある。冬に帰京するときは、上北から唯一の移動手段である鉱山所有の雪上車に乗り、東北本線の千曳の駅に出た。雪上車の乗り心地は最悪、上下左右に揺られ、船酔いになったと同じ状態で、じっと堪えていたことを鮮明な記憶として残っている。

大学4年の春、若竹寮の寮長の奨めもあって、日本鉱業の入社試験を受けた。そのときの重役面接で、「お父さんが勤務している上北鉱山のようなところに赴任が決まっても



大丈夫か？」と質問された。「冬も含め何度か行ったことがあり大丈夫です」と答えたことも印象が良かったのか解らないが、採用内定となった。父がまだ上北鉱山に赴任中であった昭和45年の春に日本鉱業に入社し、新入社員研修後、最初の赴任先は三日市製錬所との辞令を受けた。正直その時は上北みたいな山奥の鉱山でなくて本当に良かったと、胸をなでおろし安堵したものである。

父は約4年間の上北勤務後、本社に転勤となったが、昭和56年に59歳でこの世を去った。残された母は今年で94歳になるが、体力の衰えは著しいものの健在で、上北時代のことを懐かしく思い出しながら語ることがある。冬は厳しい生活だったこと、対照的に楽しかった山菜取りや弘前に桜を観に行ったこと、ねぶた祭りのことなどを懐かしく思い出すように語る現在です。

## 上北鉱山の沢山の思い出

菊池紀子

上北鉱山には沢山の思い出があるが、今思うのは雪の多さで、あの時は他を知らず生まれて住んで居たから当たり前で過ごせたと思うが、今なら絶対無理と思う。

**冬の上北：**中学3年の時、ストーブ当番があり、早く行ってストーブに火をつける係で、その日は忘れもしない猛吹雪であった。大坪台2区に住んでいたので、冬の通学路は高森

から大坪台1区の坂を登り学校へ行く。皆が来る前に教室を暖めておこうと思い、かなり早く家を出たが、大坪台1区の坂はまだ誰も歩いていなかったので道が無く、積っている雪を手でかきわけると、なかなか前に進まない。早く出て来た意味が無くなる焦りと前からの吹雪で息が出来なくなり、「私、死ぬんじゃない?」と思った事が、今でも雪を見る度に思い出します。他に幼稚園、小学校と、大坪台からの遠距離を良く通ったものだと・・・。除雪車と会うのが怖くて、慌てて脇の雪に登り、滑り落ちたらひかれてしまうと、心配性の私は除雪車に遭わないことを祈ったものでした。

週末は、方向が一緒の同級生達とスキーに乗って楽しく帰る。でも月曜日はスキーを担いでの登校に大変で、事務所に通勤の父に担いで貰った時もあった。

朝、えしゃろの戸を開けると真っ白の壁で、中に雪を落として外に出て雪片付け。窓がふさがり、開けるのに思いっきり雪を放ると高森の風呂屋の屋根まで転がって行くので、途中で穴を掘り転がって行かないようにしての除雪。

家の前の山からスキーをすると、勢いついて家の屋根まで滑って来る。父がジャンプ台を作り兄が練習していた事。兄は毎年スキーを買って貰い、セーターと帽子のお揃いを母が手編みする。兄のお下がりが私に来て、中学2年の時、スキーズボンの前チャックは恥ずかしかった。スキー大会・・・父から頑張れ、負けるなど応援してもらい張り切った事。

父兄参観日：小学6年の時、毎回早く来る母が留守で今

日は来ないんだと寂しく、皆の父兄が来ている後ろを見たら教室の入り口に父が居た。びっくり！しばらくして見たら父はもう居なくて、時間を貰ってわざわざ来てくれたのが嬉しく涙が出た。父の参観は、この時だけで忘れられない嬉しい思い出になっている。

**遠足**：良くぞ歩いて田代平まで！中学2年の時、母が実家の七戸に行って留守で、父がソフトボール位の大きなおにぎりを2個作ってくれた。中には玉子焼き、鮭、紅ショウガ入りで、1個食べたらお腹いっぱいになった。

1個残したら悪いなあ～と思っていたら、その日中村俊介先生の奥さんも留守で、昼の時間に先生が居なくなり皆が食べ終わった頃戻って来たので「もしや先生お昼持って来てないのでは？」と「先生食べませんか？」と差し出したら、先生はおにぎりにかぶりつき、アッという間に食べて「ありがとう！助かった！」と、私こそ食べて貰って「ありがとう！」でした。

**薪運び**：中学の時、父が体調を崩し県病に入院、姉兄は鉾山に居なくて、薪運びに母が困っていたので「私に任せて」と言い、同級生にそのことを話したら「俺が行ってやる」と中川幸夫君、重い物を持った事が無いであろう中村直樹君も「僕も行く」と。2人が来てくれ、本当に有難く助けて貰った。中川君がクラス会に参加した時、話したら記憶に無いとの事でしたが、してくれた人は忘れていても、して貰った方は忘れず感謝です。

中学2年の時、米内山校長先生が朝礼で私達の学年を「男女仲の良いクラス」と褒めてくれたが、本当にそう思う。40才に初クラス会をして45才から3年毎に開催している。私は最初から携わっているが中学時代話した事の無かった人、私が勝手に怖くて話さなかった人の優しさ、気遣い、思いやりに触れ、今では近況、情報交換をしている。

振り返ると、私は若い時から何かある度に同級生に励まされて来た。そして今、人生のパートナーが中学時代話をした記憶が無い同級生で、私自身も驚きだが、同級生達も驚きだった。鉾山の思い出話をして幸せに暮らしている。私にとって上北鉾山は、生まれ育ち、人生に関わりのある故郷になっています。両親に感謝です。

**上北鉾山掲示板**：私は掲示板に感謝！！」掲示板がきっかけで2学年先輩の橋本利勝さん、杉山茂さんにお会い出来てお祝いして頂きました。また、H25年には小学2年担任の大好きだった石橋昌子先生に、息子さんの投稿のお陰で52年振りに再会が出来ました。

年を重ねたら懐かしく思える故郷上北鉾山情報を見ているだけでは無く投稿で交流の輪が広がって欲しいと願っています。

43年度卒（S28生）（旧姓日野澤）

## 上北鉱山の思い出

曲山 浩

昭和22年、樺太の敷香（シスカ）から母と兄弟3人、北海道へ。父も1年程して引き揚げ、その後上北鉱山へ参りました。

立石の8号長屋は4軒あり、でこぼこ道の大通りから78段の階段を降り、中に入っていくと左側に長方形の大きなコンクリートの水溜めがあり、赤錆びた水道管から山の川より引かれた冷たい水が流れておりました。雨になると濁った赤い土色の水が流れ、底には大きなミミズが棲みついております。でも誰も気にせず杓子で水を飲み、米を炊き煮物を作ったり、秋には大きな樽に大根の漬物を作りました。

雪の多い上北鉱山は、名スキーヤーが大勢出ました。なかでもジャンプの伊藤吉彦君は小学生の頃から才能を現し、大人もかなわないジャンパーでした。私は同級生で、彼のお父さん留吉さんと近所の子供たちとジャンプ台を造り、彼が飛ぶのを皆で眺めたものです。確か小学5年生の時だと思えます。4月の青い空に真白な雲が浮かぶ下で、伊藤吉彦君は飛んだのです。

そのことを詩とはいえないのですが、15年程まえに作品にしたものを、この度「上北鉱山の思い出」文集に寄稿させて頂きました。

## “四十メートルの飛躍”

I 君、僕は君のことを、詩という表現をとおして書いてみたかった。もう幾年にもなるけど未だに一行も書けないでいる。時々ペンを運ばせたけれど僕的心情とは違って、ぼんやりとした二人の自分が姿を現し、一方は薄暗い海の底へ藻屑のように引きずり込まれ、一方は軟弱に膨れ上がった海月となって海面へ浮上し、次々と数を増し、崩壊寸前までいって突然、目を覚ますという滑稽な日を送ったこともあったのだ。

君は四年前の夏、51歳で亡くなったね。世間では天才は若くして逝くものと云うけれど、51歳は微妙だね。僕は50歳を迎えた時、永遠的な地平、郷愁の悦びを密かに感じたけれど、君の51歳が寡黙な老人のように思えたのは何故だったのだろう。この土地に移り住んで家族や親しくなった寺の住職にさえ、君の輝かしいひとつの時代を一度も口にしなかった事を、僕は随分前から知っていた。君の40メートルの飛躍は11歳の少年としては荷が重すぎたようだ。

憶えているだろう、四月も間近になろうとする山の斜面に、銀の色のランディングバーンとジャンプ台をつくり、君とスキーが時空を超え、高みへ 高みへとむかう40メートルの飛躍を、幼い僕等は目映い真空のなかで見たのだ。その時から、君の天才は垂直に昇り始め、僕等の視界より次第に遠ざかり、誰もが歎びと憧憬のなか、未来において、落下する光である事を予知する事が出来なかった。

君がいなくなったあの夏  
僕は青く広がる水田の道を空虚な乾いた眼差しで歩  
き続けた  
降りそそぐ光のなかより  
寂しく語りかける君の声が見えるようであった  
酷寒の地 孤独な異国での滑走と飛躍  
白夜のスカンジナビア

## 上北鉱山の思い出

後藤 正教

青森県の野辺地職業安定所で入社試験(試験官は森川さんと中島さんと記憶)、学科試験が終わり、身体検査があって、面接が行われました。出身が浅虫の隣町の平内町夏泊半島でしたので、試験官から特に「大羽イワシ」について聞かれたこと、合格通知が卒業式終わっても無く、鉱山に赴任する間に連絡を受けたことなどを記憶しています。

3月中旬に乙供駅に降り、そこから確か午前10時頃かと思いましたが、「馬櫓」に乗って途中2か所くらいで休憩して、上北鉱山に着いたのが薄暗く午後5時過ぎ?だったと思います。周りの風景が見えず、どこに来たんだろうと心細く感じたのを覚えています。それから事務所に入り、清交寮に連れていかれて、馬櫓仲間5人で「たこ部屋」でも来たのかなーと話し合ったものでした。

入社した昭和31年の「上北ニュース」には、まだまだ工事が盛んで

- \*選鉱設備の拡張合理化
- \*かつ鉄鉱の採掘
- \*アパート建設
- \*田代隧道の掘削

等が載っていました。入山翌日から坑内等の見学、鉱山の概況等の教育があって、配属されたのが「選鉱課」の受入れで、坑内から鉱石を積んだトロッコを受け、そのトロッコを線路の上でひっくり返し、鉱石を落として鉱舎に入れる作業でした。

試用期間半ば頃、突然、選鉱課事務所配属を命じられて、それまで昼の弁当が足りないくらいの重労働から、ハンザ（各員の出欠を確認、各担任が管理）から出勤簿の整理をしたり、選鉱の事務の雑用だったりでした。当時吉田担任と高木女子社員が事務に居り、担任が異動した後は選鉱成績を作れるようになりました。

課長会議に呼ばれて、坑内から出た採鉱課の品位と選鉱課の品位が違うことを、当時の橋口課長から何故かとよく聞かれたものでした。採鉱では塊のサンプルで、選鉱はマイナス200メッシュにした細かいサンプルを自動サンプラーで採取したものを基にしているので精度の面から当然と回答すると、生意気だとよく言われました（鉱山ではこの品位が収支や存続のキーポイント）。



昭和37年1月、総務課勤労係に配属されて給料計算を主にやり、37年の退職者が大勢出たときは、年金手帳の紛失に伴う再発行の交渉のため八戸社会保険事務所に何回か出張したり、事務所2階屋根裏の賃金台帳を探したり（再発行の証拠）、38年5月、船川転勤までお世話になりました。

寮では、戸を開ければ「クラブ」で、宴会の残り物の「爛冷まし」があったり（これは内緒かな）、勇ましい学卒がおり、障子を次々と骨ごと破かれて後に勤労に呼ばれたり、寮の屋根の上にスキーで行けたり、家に入るとき玄関に雪の階段で入る雪深い生活、寮の部屋の山側の戸を開ければ、まだ冬の名残の雪の空洞、寮の人達と「高森山」へ硬い雪の上を歩ける春のピクニック、田代平のつつじの庭園、元湯温泉での入浴、田代平と坪川への「イワナ釣り」（イワナは最初5回くらいが坊主で、難しい釣りでした）。また、坪川で釣りの最中にラジオで秋田の夏井昇吉さんが世界柔道の王者になったことを知り、のちに夏井さんと公衆の温泉でよく出会ったものです。

仲間と春の八甲田・鳥海山登山（秋田に転勤してから回数がかかなり増えた）、そのほか数えきれない思い出を、7年間でしたが経験させてもらい、入社前にこんな山奥に鉱山があり、数多くの人が住み、生活しているとは想像もしていなかった。

上北は自然、人情、職場、生活の環境は良く、ここに住んでいる人がみな家族という社会でした。

(参考—上北鉱山、船川製油所、本社  
潤滑油部、秋田備蓄で42年間勤務)



＜中の沢の冬の夜景＞

## 映画館と上北鉱山

工藤 俊

遠いむかしテレビがあらわれる以前に、〈映画〉は家族と子どもたちにとって、おおきな娯楽であった。子どもむけの映画だけでなく、小津安二郎や溝口健二・成瀬巳喜男・増村保造と云った名監督たちの作品を、幼少のころから無意識に家族とともに鑑賞したことが、のちにわたくしが映画好きになることに繋がった。

ものごころつき、映画は〈監督〉で観るもの、と意識するようになり、監督小津安二郎の作品を観つづけていたとき、「小早川家の秋」（1961年制作）を鑑賞していて、驚愕したのだった。

作品のなかで焼き場の煙突から出る煙と、地藏尊に群がるカラスの映像があり、どこかで観た記憶が鮮明によみがえったのだった。上北鉦山にあった「焼き場」は子どもたちにとって、学校への登下校などの途中でそばを通るとき、いわゆる〈怖い〉場所だった。その記憶と同時に、小学校グラウンド下にあった鉦山の〈映画館〉で、その〈映像〉に畏怖したことをおもい出したのである。

同様に成瀬巳喜男監督の「鰯雲」（1958年制作）の終局場面で、雲の映像の〈美しさ〉を記憶していたのだが、子どもごろころに、あの〈雲〉がいわゆる〈鰯雲〉というのかとの記憶もあり、のちにやはり有能な監督たちが紡ぎ出す場面〈シーン〉が、いかに記憶に残るものなのか、ということにもおもいをいだいた。

「鰯雲」はいまで云う〈不倫〉がからむ作品であり、当時10歳に満たないわたくしは、もちろんその内容にまではおもいがいたってはいない。

さらに記憶をたどれば、増村保造監督の「からっ風野郎」（1960年制作）がある。おそらく新進気鋭の作家三島由紀夫が主演とのことで、家族とともに鑑賞したと記憶している。過日、観なおしてみると、落ち目のやくざを三島由紀夫が演じているのだが、50年近く以前に観た作品だけあって、三島由紀夫演じるやくざと喘息もちの殺し屋の役を違えて記憶していた。最後に三島扮するやくざがエスカレーターで殺しにあう、大仰にえがかれた場面だけは鮮明に覚えていた。

映画監督増村保造は、女優若尾文子を多用したことや、そのスピーディな場面の展開で知られている。

周知のように小津安二郎監督の名作「東京物語」（1953年制作）は、2012年イギリスの「サイト・アンド・サウンド」誌で、世界の数百人の映画監督たちの投票で、世界映画史上ベストテン1位になった。（この評価はここ10年うごくことはない。）

先にあげた成瀬巳喜男監督も、かの「浮雲」（1955年制作）などによって、つとに世界的に知られた名監督でもある。

こうして小学校のグラウンド下にあった上北鉦山の「映画館」についておもいを巡らしていると、当時10歳前後であったわたくしを、何を目当てに映画館に通わせたのかは、おそらく日活のアクションものや、東映の時代劇であったことがおもい出される。

しかし、やはり名画と云われる作品の場面、場面（シーン）はおさなごころにも記憶に残るものなのだ、と云うことをあらためて実感させられている。

亡き父母のおかげもあって、ここ何回か「上北鉦山の会」の実行委員会に出席している。会合のなかで実行委員のひとりである佐藤宏司様が、その映画館関係で仕事をされていたとのこと、また福利・厚生関係の担当でもあったとのことでもある。映画など文化的な理解者もいなければ、こう云ったプログラム編成も成り立たなかったろうとのおもいもある。

冬は殊にあの雪深い場所にあった鉱山の「映画館」を、時おりおもい出しながら、齢を重ねてもまだ、池袋・神保町・京橋・新宿などに、かつての名画や新作映画を観に脚を伸ばしている。

## 文化の視点から、記憶の断片

佐藤 宏司

**事務所の図書室** 私は昭和 25 年から 36 年水島製油所に転勤するまで、総務・勤労の仕事に携わった。勤務する鉱山事務所に図書室があり、本の貸出しが行われていた。蔵書が豊富で、よくこれだけのものが揃っていると感心したものである。おそらく、地域から孤立する山奥の生活に配慮した会社の予算で備えられたのであろう。

雪に埋もれた長い冬期間、読書に浸るのは無上の楽しみであった。「ジャン・クリストフ、チポー家の人々、魅せられたる魂、戦争と平和、アンナ・カレーニナ、風と共に去りぬ」等々、枚挙にいとまないほど多量の本を読んだ。先年、貸出し係だった瀬野尾愛子さんに「よく読んでいたね」と言われた。

**演劇** たまたま、借りた本の中に岸田国土の脚本集があり、その中の「葉桜」が気に入って、上北劇場の秋の文化祭で上演することになった。母娘が会話をするというシンプルな劇である。娘が彼氏の話をしているうちに母親が嫉妬して、思

わず針仕事で持っていた物差しがしなる場面が印象に残る。

この劇は3回上演し、3回目は青森の演劇祭にも参加した。1回目は母親が田村美智子さん、娘が小林妙子。2・3回目は娘が工藤とし江さん、母親が木村お坊さんの娘さんだった。舞台装置は山田昌幸さん・松下嘉明さんはじめ、中学時代の親友・川村友人、中西茂、貝森博の諸君が照明や音響効果を担当してくれた（この方々はその後も手伝ってくれた）。

翌々年の文化祭で同じく岸田国士の「驟雨」も上演した。新婚旅行から帰ってきた娘の話を家族が聞く場面だ。蒲郡の旅館に泊まったが夫が朝帰りはするわ、日本地図を書いて蒲郡を示せと夫が言うから、さっと書いてやったら「なんだそれは、きゅうりか」と言ったと、娘が怒るところが笑わせた。配役に佐藤忠弘さん、田村美智子さん、工藤とし江さんなど。

木下順二作「夕鶴」も上演したことがある。「つう」には首の長い同級生の根本誠子さん、「与ひょう」に兄の武彦、女童3人は小学生で、長利所長の次女の方も演じてくれた。

炭鉦鉦山文化協会派遣の演劇では、前進座、俳優座などが来演した。俳優座は田中千禾夫作「おふくろ」で、岩崎加根子、平幹二郎が演じ、劇場の後で田中千禾夫さんが舞台を見つめていたのを覚えている。飯坂温泉での演劇講習会に参加した際、たまたま浴場で平さんと二人きりになり、平さんに「仲代さんのように有名になりますね」と声をかけたら、本人は「ととてもとても」と謙遜していた。

**映画** 上北劇場では、月10回程度映画を上映していた(日

本鉱業 80 年史)。厚生係に映画選定委員会が設けられ、青森の業者が提示するリストから上映作品を選んでいった。ある時期からその選定委員に加えられた。娯楽ものと芸術作品とのバランスを採るため、業者にフィルムを探してもらったりした。「哀愁、逢引き、田園交響楽、望郷、外人部隊、地の果てを行く、大いなる幻影、ガス燈等々」いわゆる名画を随分鑑賞できた。上京したついでに銀座・秀吉ビルのキネマ旬報社を訪ね、田中純一郎編集長（日本映画史家）にこの仕組みを話したところ、珍しい、ぜひ書けと言われ、寄稿欄に掲載されたことがある。

**上北ニュース** 和田山善之さんから「上北ニュース」の編集を引き継いで 1 年後、東京での炭鉱山社内報講習会に参加。50 紙ほどのうち「上北ニュース」が最優秀紙に選ばれ、及川賞（講師・東京新聞論説委員の及川六三四氏）を頂いた。昭和 30 年 1 月創刊以来、努力を重ねられた和田山さん、山田昌幸さんらの労が報いられたと、感慨一入だった。

## 雪また雪、そしてまた雪

白根澤 亘

私が、昭和 31 年（1956 年）8 月 東北線の「乙供駅」から野辺地営林署のトロッコ軌道に乗って上北鉱山の入り口である「坪川」に着いたのは午後もだいぶ遅くなってからだ。坪川には鉄筋 3 階建てのアパートが建っていて、ヤマは想

像以上に開けていると期待させるものがあった。出迎えの警務の人に、山神祭で呼ばれた“花火師”と間違えられて、その足で着いた清交寮の面々の爆笑を買った。

同時に赴任した寺江さんは「探査課」 中藤さんは「採鉱課」と所属がはっきりしていたが、私は、まず「経理課」の採鉱本坑係の計算方として、毎日払出伝票の集計に追われ、ついで「総務課」の勤労係に配属された。翌32年の“全鉱離脱問題”などで、理屈っぽい組合長の中野民夫さん、愛すべき高松 敏さんなどを相手に、青ニオながらもそれなりに苦労した記憶が残っている。

### ・雪が大好き

私の生まれ故郷 福島市は、周囲を山に囲まれフェーン現象が起きやすいので、夏は前橋や熊谷などと並び称される全国屈指の「暑さ処」であり、冬は雪が少ない割に奥羽山脈からの寒風が吹きすさぶところである。小さい時から冬になると、竹スケートや長靴スキーで遊んでいたもので、寒さには比較的強く、雪は大好きであった。高校時代には、磐梯山での国体に出場、大学時代には山岳スキー部に所属し、吾妻連峰、蔵王などを根城に大いにスキーを楽しんだものだ。

それにしても上北の雪は凄かった。31年から4度の冬を過ごしたが、独身の気楽さもあって、雪の思い出は楽しいものばかりである。



## ・寸暇を惜しんで滑りまくる

学生時代のスキーは出かけるだけで金がかかるが、なんとかSAJ(全日本スキー連盟)2級の資格はとっていた。それなりに整地？されたゲレンデでのテストの結果である。

それが、この上北ではタダでスキーが出来るのだ。毎日お昼近くなると、事務所のわが机の下でスキー靴の紐を締め、昼飯もそこそこに選鉱場脇の斜面で滑る。幅が狭くかなりの斜度があり、転んでばかりいたが、楽しいものは楽しい。昼休み一杯滑りまくっていた。

33年 ヤマでSAJの検定があり参加した。検定委員長は三浦敬三さん、委員の中には、総務課の最上政彦さんがいた。決められたコースをそのとおりに滑っただけで、ヤマの連中の体に染みついた実力派には及ばぬ“形だけの”1級に合格した。

山内スキー大会  
雪庇の厚さを見よ！



(注) 三浦敬三(1904~2006年)は、青森営林局を退職後、JSAの技術委員 その後70才ヒマラヤ、77才キリマンジャロ 99才にはモンブランをスキー滑降し、一躍世界に名を知られることとなった。

## ・寮の除雪の本当の愉しみ

「中の沢」の斜面に建っている清交寮の窓は、板を打ち付

けて割れないようにしてあるが、屋根までの雪で昼でも部屋は真っ暗である。春先 谷側を除雪して板を取り外す。そうすると山側の雪が建物を押してきて、今にも潰れそうで不気味である。谷側の雪は谷に落とすだけでいいが、山側はそうはいかない。全員総出のスコップでのリレー除雪が始まる。汗びっしょりのあとの友と飲むビールこそが、除雪に精を出す本当に目的なのだった。

#### ・雪上車の尻尾にくっついて

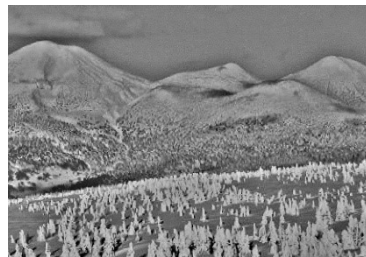
坪川と千曳の間は、馬櫓から雪上車に昇格した。雪上車\*の定員は 10 人位で、その後ろに自家製の櫓をつけていた。ある程度スキーを操れる人はロープで引っ張られることが許された。私も坪川沿いの斜面をエッジングしながら下った覚えがある。

(注) コマツ製の雪上車は、まだ試作段階にあり、ましてや運転は未経験の者ばかり。実際には、10 年後の第 9 次国際南極観測の極点往復で活躍した。

#### ・八甲田ツアー

33 年の春先だったか、施設課の上島副課長をリーダーに、有田先輩、山田昌幸さん、同期の中藤さんと八甲田にツアーに出かけた。「奥の沢」を経て、だだぴっろい「田代平」

北八甲田の山々



を黙々と歩き続けた。やがて右手に雛岳 (1,240m) を、続

いて高田大岳（1,552m）そして右手前方に大岳（1,585m）  
に見える頃になると、一体いつになったら下り坂になるのか  
とぼやきが出てくる。小休止\*の後、「硫黄沢」を振り子の  
ように右左とシュプールを残しながら、一気に「酸ヶ湯温泉」  
へ。

「奥の沢」までの登り、最後の「硫黄沢」の降り以外は、  
ほぼ平坦な雪道だったといえる。片道15キロ。酢か湯温泉  
の前には、“文芸春秋”に紹介され有名になった鹿内老人が  
ラッパを吹いて歓迎してくれる姿があった。そして湯上りに  
ヤマメの粕漬を焼いての一杯が忘れられない。

（注）“小休止”の際、高田大岳からかなりのスピードで  
滑ってくる人影があった。我々の前に雪煙りをあげて止まっ  
た二人連れは、三浦敬三、雄一郎親子だった。上島課長は面  
識があったので、暫くスキー談議に花を咲かせた。息子の雄  
一郎さん（2013年80才で3度目のエベレスト登頂を果た  
すなど余りにも有名である）は、その頃は母校北海道大学の  
獣医学部の助手をしていたが、すでに自らの滑りを“ドルフ  
ィン滑降”と称していた。

35年（1960年）の春、本社に転勤となる。木戸が沢鉦山  
に転勤の掛川さんと事務所前を雪上車で青森に向け出発。奥  
の沢を越えるときには、4年間のいろいろな思い出が走馬灯  
のように頭を駆け巡った。

それにしても、上北の春は素晴らしい。汚されていない純白の残雪、清冽な雪解け水、露の臺など山菜の新芽、木々の新緑。これらが同じ舞台に同じ時に出現する。長い厳しい冬の夜明けに、これほどの天の配剤は無かりしものと思う。

そのご、本社と三日市製錬所勤務を経て、44年設立間もないアブダビ石油に出向し、“北の国”から一挙に40度を超す酷暑の砂漠で過す羽目になった。

日鉦復帰後 電子材料事業の5年に続く17年間 関係会社を渡り歩き66才で引退したが、社会人となった最初の4年間 上北の自然と人々に触れ、そして未だにその頃の人々と交遊を重ねることが出来るのは、私のにとって得がたき財産であると思っている。

## 上北鉦業所（上北鉦山）休止時の思い出

鈴木 幸男

上北鉦業所（以下上北鉦山と記す）の休止となってから、時は流れて42年が経過した。顧みて昭和46年4月27日、総務課労使窓口担当の太田さんより昨日、中央労使協議会において「上北鉦山の操業変更の申し入れ」があった旨、労働組合に伝達された。

当時私は労組書記長として専従しておりましたので早速委員長はじめ、執行委員全員に連絡をとり、その日の夕方緊急執行委員会を開催、予知がなく突然、寝耳に水の問題だけ

に議論は百出し、荒れた会議となりましたが、ともあれ、具体的な真相を把握することが先決ということとなり、翌日箇所労使協議会開催の手続きをとり協議会の開催となりましたが、会社の説明は、一部操業の変更の申し入れがあったこと、変更後は操業要員を残し、余剰となる人員の取扱いについては詳細な情報、連絡は入っていないということでありました。

この協議会は、かなり厳しい応酬となりましたが労使共に情報を共有し、この難局を労使一体となって取り組むことを確認し閉じました。ほどなくして日鉱連から「4月の中央労使協議会において上北鉱山の露天掘り、坑水除害要員を残し大幅な操業変更の申し入れ」があり、これから日鉱連としての取り組みについては組織内部に独自に設置されてある「鉱山特別対策委員会」において、内容の究明と今後、現地の実態把握、疑問点を解明する段階なので中央労使の動向を見守ってほしいこと、加えて、軽率な行動はくれぐれも自重してほしいという電話連絡があった。この自重の要請は、今思えば昔から上北鉱山といえば頑固一徹の気風があると他から見られていたため、暴走のないようにということだったかもしれませぬ。

5月下旬、日鉱連は会社に対し、上北鉱山の操業変更申し入れ了承の回答をし、続いて6月9日に開催された緊急代表者会議において、上北鉱山の操業変更について確認決定された。

これを受けて現地上北鉱山の諸問題に対応する「労使による対策委員会」を設置し、一つ一つの問題に取り組むこととなりました。

最初に問題となったのが地元地域、自治体への対応であった。今まで鉱山からの受益が大きく、村財政は鉱山に依拠している現状から操業変更（実は閉山と等しい）内容をダイレクトに発表し、説明することは地元に大きな混乱をもたらすことと、鉱山に働く者の動揺を避けるため、個々人の受け入れ先の確定作業が始まる8月頃まで詳細発表を控え、従来どおりの生産を継続することとしました。この時期（6月中旬）天間林村の村議会選挙公示があり、上北鉱山は「何にも変わったことはありません」という内外共に知らんぷり作戦をとり、施設の高砂さんを上北鉱山の候補者として選挙に送り出し、結果は高位当選を果たしましたが、その時の気持ちは喜んでよいのか、申し訳ないという気分も絡みあって苦い思い出となっております。高砂さんも当選2か月少々で議員を辞職され、落選の次点者が繰り上げ当選となり、本人自身が鉱山にあいさつに見えられましたが、上北鉱山休止を喜んでくれた唯一の人でした。

中央労使で10月1日から操業変更を実施することの決定もあり、上北鉱山はご承知のように10月には降雪の時期で、これを過ぎると身動きがとれなくなることも考慮し、操業変更後に残る従業員11名を残し、転出先の選定が集中的に行われました。本社から人事担当の藤井さん他1名と総務

の皆さんのご尽力のお陰で、鉾山で臨時員として働いていた者、商いをしていた者も社員として登用され、働く者全員が無事鉾山を退去できたことは熱い思い出となっております

鉾山からの本格的な転出は8月中旬頃から始まり、青森交通の特別仕立てのバスが連日運行され、見送る人、見送られる人、別れに涙を流す情景は今でも胸の締め付けられる思いです。また、長屋住宅は夕方になると1軒、1軒灯が消えていく寂しさ、やるせなさは、一生私の脳裏から離れることはないのかもしれませんが。

## 昼の弁当は屋根の上

高砂 和男

私は、昭和33年、青森県七戸町の上北鉾山中学校卒業で、当時、2クラス71名の人員でした。終戦後の食糧難の時代に育った我々は、いつもひもじかった。家の食器棚の中にある調理用の砂糖をじかになめて母によく怒られた。父は鉾山の選鉾課勤務で交代制のため、深夜に吹雪の中を出勤していたのを覚えている。

厳しい地獄のような冬は中学生の我々でも辛い耐え難いものでした。それだけに春の雪どけの頃の土の香りとマンサクやコブシの花を見つけた時は、小躍りして喜んだ。

そんな中、昼の弁当は本当に楽しみでした。中学3年の春先のことですが、長く閉ざされた雪地獄から解放され、周囲

には未だ雪が残っているのですが、学校の一部の屋根が見えだすと、皆で屋根上に出て、日なたぼっこをしながら弁当を食べるのである。弁当は教室の石炭ストーブの上に吊るされている金網の上で暖めてあるのでホカホカだ。授業中、この弁当のタクワン臭が教室中に漂うが、食い気の方が増さるので気にもならなかった。

私の弁当はジュラルミンのドカベン、中味はのりを敷きつめた上に醤油をかけたのりベンで塩鮭の切身とタクワン、時々、梅干か紅ショウガである。ご飯に時々、鉾石が混じっており、ガリッと噛んでしまう、母に文句を言うと「鉄索で米を運搬するので、どうしても細かな鉾石が混入するんだよ。」とっていました。

屋根の上で弁当

雪がとけて、屋根上の弁当が終わると、今度は学校の裏山に出て新緑のむせるような草むらや木の下で食べるのです。時々、カメ虫の集団に遭い、ご飯の中に入れて



しまう、「わー、へタレ虫にやられた。」と大騒ぎしながら、このへタレ虫と闘った。食後は山の沢に入り山菜取り、へび、カエルと遊び、ハチに刺されたりしながら教室に戻った。このような八甲田山の麓の大自然の中で厳しきや楽しみを学び、自由奔放に育ったことが私にとって忘れ



られない思い出である。

(昭和33年卒業)

## 上北鉱山軌道車（ガソリンカー）等の歴史

高砂 和男

昭和11年 三井系列の高森鉱山がガソリンカーを1台所有していた。同年、三井より日鉱へ経営を委託し、上北鉱山が開山。3日に一度、10台位の鉱石車を高森鉱山の機関車に牽引してもらっていた。

昭和12年 上北鉱山でも機関車を購入。

昭和13年4月 索道ができて鉱石輸送の役目を解かれ、人員輸送用になった。

※上北鉱山(坪川)と乙供間の所要時間2時間(距離32km)

昭和22年 機関車を2台購入、昭和26年 客車が屋根付きになった。



同型機関車と  
屋根付き客車



※6両連結、1車両に18人定員。軌間610mm。

※営林署軌道に鉱山軌道車が毎日2回往復していた(5月～

11月の間)。

※冬期間は(12月～4月)馬櫓に代わる。多いときは60頭が運送に供された。

※昭和30年12月 冬期の輸送に雪上車が運行。

上北～田代～横内(青森市内)間35kmを1時間30分で運行。9人が乗車できた。

※昭和32年 冬期輸送の雪上車が、田代経由から乙供行きに切り替わる。

※軌道車(ガソリンカー)が廃止される。

昭和33年10月 夏期輸送に市営バスの仮運行を開始。田代隧道口～青森駅間を2往復。

※昭和34年7月 夏期輸送の市営バスが開通。上北～田代～青森筒井～青森駅間30kmを2時間で運行。1日3便。

ガソリンカーとアイス  
クリーム売りおじさん



【参考文献】

上北ニュース

青森森林管理署

全国鉱山鉄道 JTB

全国森林鉄道 JTB

全員集合写真



## 私の上北鉱山

高野 栄吉

どこから「私の上北鉱山」をスタートさせようかと迷っていた。鉱山に来る前、私は郷里の市役所に勤務していて、1年が過ぎた昭和25年の春、故郷に別れを告げたのです。辛い思い出であった。

養母に連れられ東北本線乙供駅に下車した。さびれた寂しい駅。トロッコ列車に乗り継ぎ、ガタゴトと、どの位の時間がかかったのか覚えがない。そこから「私の上北鉱山」が始まったのです。

二つ割りの家で、隣には主任さんが住んでいた。私は3畳間に押し込められた。

どうにか職を得て、奥の沢から総合事務所へ通勤した。冬期は全身がすっぽり埋もれてしまう程の豪雪で、長靴スキーではどうにもならない。やむなく寮に入った。

上北鉱山の最盛期の人口は4,000人にも達したとのこと、外部から隔離された一つの町村を成していた。そして時は流れていった。

鉱山の資源には限りがあり、縮小の風が吹き始めたはしりの風に乗って、私は仙台事務所へ転出した。上北鉱山在籍は8年ほどであった。仙台事務所は鉱山の出先機関としての役割のほか石油販売の業務を担っていた。会社の石油業務の拡大に伴い、「営業所」、「支店」と名称が変わっていった。

その後、私は本社に転出、時を経て再び仙台事務所に移っ

た。そのころ上北鉾山は既に休止していた。当時、当局（鉾山保安監督部）による休廃止鉾山の鉾害検査が定期的に行われていた。ある時、当局による上北鉾山の鉾害検査が実施されるとの情報を得て、検査官に同行した。ゴーストタウンとなった上北鉾山、なんとも見る影もなかった。

検査官が上北鉾山坪川近辺の採水を行っていたときのこと。そこから少し上流地点で大きな切り株に巨大キノコを発見したのです。キノコのお化けである。両腕で抱えきれないほどの大きさであった。嬉しさのあまり舞い上がったのです。正にその名に相応しい「舞いタケ」を実感した瞬間でした。

上北鉾山は私を大きく育ててくれた。そして夢の青春時代を過ごした思い出いっぱい詰まった感謝の「私の上北鉾山」なのです。

## 高森部落の思い出

長谷川 勉

《プロフィール》

昭和23年12月上北鉾山で生まれる

昭和36年3月上北鉾山小学校卒

昭和39年3月上北鉾山小学校卒

昭和42年3月県立青森工業高等学校建築科卒

昭和42年3月東急建設(株)に入社

昭和49年3月東京から仙台に転勤、同5月に結婚

平成23年3月東急建設㈱を退職

平成23年11月㈱ジャパンクリーン入社

平成25年8月病気のため、㈱ジャパンクリーンを退社

平成26年3月空調企業㈱入社、現在に至る

父母：長谷川勝（立石坑勤務のち交換手）、長谷川ソノ

家族：妻（上北鉦山小・中同級生旧姓佐々木幸子）

子供長男・長女（仙台在住）

孫2人（長女の娘）

趣味：家庭菜園、ゴルフ、溪流釣り、スポーツ観戦

### 《5軒長屋と薪ストーブ》

生まれてから小学校1年生ままで（昭和30年）は、高森部落から大坪台にあった中学校に登る坂道の右手前にあった5軒長屋で生活をしていました。

当時の長屋は叩きの廊下があり、両サイドに共同の流し場と共同のトイレ（勿論汲み取り式）があり、出入口は中央に1カ所、トイレ側に1カ所の都合2カ所でした。薪ストーブの燃料は、年中廊下の片側にはいつも薪が積み上げられており、秋になると会社から各家庭に支給された薪を鋸で半分に切り、蒔き割りをしてから廊下に補充をしていました。

部屋は6畳2間、襖で仕切られていて、手前の廊下側の部屋に薪ストーブがあり、このストーブで暖房や煮炊きなど全てを行っていました。

父親は立石坑の最前線で削岩機の作業をしていたため、母

親はこのストーブでほとんど毎日のように鉱石でドロドロに汚れた作業服を大きな鍋で煮込んでから、タライと洗濯板で四角い固い石鹼をゴシゴシ摺り付けながら格闘をしていたのを思い出します。

当時の入居者は、流し場側から底田さん、鈴木さん、武山さん、鈴木さん（親戚）、長谷川家の5家族が入居しており、もちろん防音設備などは完備しておらず、プライバシー等は全くなくて、子供を叱る声や夫婦喧嘩のやり取りなどが飛び交っていて、お互いの生活が丸見えの時代でした。



私が5歳のとき、5軒長屋の脇で父親と妹律子2歳

### 《越田のばばちゃんが出た～事件その1》

多分、私が6歳位の頃、近所で口が煩くとても怖かった越田さんのばばちゃんが亡くなった時でした。部落の主婦が総出で通夜のお手伝いに出かけていて、5軒長屋の私の家で私の兄弟3人と小山内さんの兄弟3人が留守番をしており、6畳2間の奥の部屋で襖を締めた状態で、折りたたみ式の卓袱

台でオハジキをしていたら、不思議なことにいきなり4枚全ての襖が次々と卓袱台の方に倒れて来ました。(後で皆に確認をしましたが、誰も襖にぶつかった覚えがないとの証言でした。)

その時、姉(当時6年生)が『越田のばばちゃんが出た〜』と叫んで、皆で卓袱台の下に先を争って潜ろうとした事件がありました。

実は、この部屋は長谷川家が入る前は、越田さんのばばちゃんが入居していたとの事でしたので、お別れに戻ってきたのかも？

### 《越田のばばちゃん火の玉事件その2》

越田の婆ちゃんが亡くなり、2軒住宅の片方で通夜が行われており、隣の西野さんの家で姉(則子)と姉の友人で一つ下の錦子さんと私の3人で留守番をしていた時のことです。

ストーブの置いてある6畳の部屋の卓袱台で話をしていたら、窓に直径5~10cm位のオレンジ色(黄色に近い?)の火の玉が、3~4個くらい浮遊しているのを私が最初に発見し、2人に「ほら火の玉が見えるよ〜」と叫んだところ、2人が「ほんとだ、火の玉だ」と震えて固まってしまった?

3人一緒に見えたので間違いなく「火の玉」で、火の球は存在しているのだと今も信じています。

## 《高森野球チームと佐々木和哉さん》

私が野球を始めた話をする際、どうしても外せない存在が、同じ部落で4年先輩の佐々木和哉さんです。

自分は小学校5年生から軟式野球をやり始めたのですが、当時和成さんは心臓が悪く、激しい運動が出来なかったのですが野球がものすごく好きで、当時としては珍しかったベースボールマガジンを毎週購入しており、そのころから話題になっていた立教大学の砂押監督、選手の長嶋茂雄、杉浦忠、本屋敷錦吾の大ファンでした。

その後、長嶋選手が巨人に入ったのをきっかけに、私は今でも巨人ファンです。

和哉さんは、病気で中学校の野球部に入れなかったため、高森部落で我々小学生を集め、監督になって高森部落にあったグラウンドでほとんど毎日練習を行い、シート打撃では大学ノートに成績を付けて、各自の打率を伝えながら私たちに興味を持たせ指導して頂きました。そのお蔭で他の部落との対抗試合での勝率が良かったと思います。

その当時の私（ピッチャー）のユニホームは、母親の手作りで靴は未だゴムの短靴でした。また、おもちゃなど買ってもらえない時代でしたが、父親から当時としてはかなり高価な本革のグローブを買ってもらい、とても感激をして枕元において寝たのを覚えております。

佐々木和哉さんは中学卒業後、浪岡高校に入りましたが、



高校 1 年の春休みに弘前大で心臓弁膜症の手術を行ったそうですが、残念ながらそのまま他界されました。感謝・合掌

『高森球団株式会社』

代 表：佐々木和哉

創 立：昭和 3 4 年

本拠地：高森野球場

事務所：青森県上北郡天間林村大字天間館一番地高森部落

監 督：佐々木和哉

内野手：中村昭男

コーチ：佐藤岩男

内野手：小山内敏夫

コーチ：西野清

内野手：福田英樹

投 手：長谷川勉（主将）

内野手：長谷川勉

投 手：瀬川初男

内野手：三上喜一

投 手：折戸谷繁

内野手：瀬川征

投 手：福田英樹

外野手：折戸谷繁

捕 手：山田紀寿

外野手：瀬川初男

捕 手：東海林新一

外野手：田島征道



後列右側が監督の  
佐々木和哉さん？



私（5年生）のピッチングフォーム、後ろで鼻を拭いているのは多分、瀬川征君

## 《結び》

思い出は語り尽くせないほどありますが、わずかなページを寄稿させて頂きました。

上北鉦山での生活は、私の人生の原点でもあります。帰る故郷はなくなりましたが、当時の諸先輩、同級生、後輩の皆さんとは、固い「絆」で結ばれており、心の中の故郷は、何時までも消えないで残っています。

「上北鉦山の会」の継続と諸先輩、同級生、後輩の皆様のご健勝をお祈りいたします。

## 坪川と子供の頃の思い出

山口 鐵男

坪川というのは、山々から流れて来る大坪川と小坪川と呼ばれる川が合流して流れ下った川のことです。天間集落を流れて行く。大坪川は上北鉦山周辺で多くの沢からの水を集めて水量を増し、天間ダムに至った。小坪川と合流し、ここからは「坪川」となる。

上北鉦山の操業は昭和 10 年、硫化鉦床が発見されてか

らである。昭和 11 年、日本鉱業（株）は三井栄一氏から委託を受けて経営に当たり、本坑に続いて立石、奥の沢の硫化鉱床を発見、そして昭和 15 年、鉱区を譲り受け本格操業に入る。

上北鉱山は鉱物資源に乏しいわが国にとって貴重な存在であり、その果たした役割は大きかった。上北鉱山の最盛期は第 2 次世界大戦から昭和 20～30 年代であり、その後は資源の枯渇、あるいは鉄の自由化とも相俟って急速に衰退していき、昭和 46 年 9 月に坑内採掘作業を中止。48 年 6 月には露天採掘作業も休止し、事実上の閉山となった。採掘中止後は旧坑口の密閉工事、ズリ堆積場浸透水等、一連の鉱毒工事を実施し、主要工事は終わっている。坑内湧水については、坑水自動化処理装置を導入し、現在も 5 人の職員が日夜中和作業に当たり、処理には万全を期しているという。

操業中、鉱毒のため死滅した川魚は、中和作業の進展により、ようやく魚影がみられるようになり、釣り人には隠れた釣り場があるとも言われる。

現在、上北鉱山へ行くには二つの道がある。一つは以前にガソリンカーが通っていた道、もう一つは青森市から田代平に出て山越えをする道である。かつて栄華の跡をたどって見ると、その荒廃ぶりと寂寞たる眺めに胸が締め付けられる思いである。

## 上北鉾山小学校の児童数・学級数の推移

(昭和 40 年度まで。天間林村史より)

### 上北鉾山メモ

(昭和 32 年 10 月 1 日現在・事業所案内から)

精鉾の運搬架空索道により野内駅へ (19 km.)、銅・亜鉛・硫化鉾。

人員・重量物の運搬乙供駅から上北鉾山までガソリンカーで 28 km、冬期は千曳駅から雪上車で運搬。

人口約 3500 人、住宅 724 戸、アパート 18 戸 4 棟、

年度 (昭和)	学級数	学童数	年度 (昭和)	学級数	学童数
13 年度	1	26	33 年度	14(2)	653(35)
26 年度	12	517	34 年度	14(2)	654(35)
27 年度	12(1)	489	35 年度	14(2)	624(33)
28 年度	12(1)	496	36 年度	14(2)	568(37)
29 年度	13(1)	526	37 年度	13	496
30 年度	12(1)	556(25)	38 年度	10	358
31 年度	13(1)	608(31)	39 年度	8	271
32 年度	14(1)	611(40)	40 年度	6	189

小学校 ※( ) 内は奥の沢分校数値です

公営住宅 10 戸、独身者寮 2 棟、共同浴場 8 軒、理髪店 2 軒、美容院 1 軒、生活用品供給所 3 か所医療内科、外科、産婦人科、眼科、歯科があり、従業員と家族は健康保険組合が負担、学校小学校 1 (本校、第 2 校舎、奥の沢分校)、中学校 1、

高校 1（七戸高校上北鉱山分校）その他劇場、学生寮（青森市、東京都）。

以上、日本鉱業（株）上北鉱業所の歴史を思い出し記する。

青森市内に住んでいる山口鐵男

## 上北鉱山の思い出

山下 直樹

今を去る六十有余年の昔になるが、日本鉱業に入社し本社教育、一般実習、専門実習を行って、昭和 32 年 3 月に上北へ参りました。

JR 乙供駅で下車し、雪上車（定員 8 名くらい？）に乗って山元まで来たものです。雪上車なるものは生まれて初めての経験で、南極への派遣の人たちも上北で雪上車の訓練をしたと、後で伺いました。

雪の階段を下りて合宿かクラブの玄関から中に入りました。さすが年間積雪量二十数メートルの実力は一見して実感しました。

上北鉱山は三つの鉱体から成り、本坑、立石坑、北坑に分かれていました。最初に本坑硫化鉱と 45メートルの一部を担当し、次が北坑の坑外（褐鉄鉱床等の採掘）、沈澱銅の採取、冬場はブルドーザーによる除雪（道路の確保）作業を行いました。

三鉱体のうち立石坑は最後で、含銅硫化の採掘でした。三

鉦体それぞれに特徴があり、三鉦山で採掘法の勉強をしたと同じ結果を得たものでした。

### ・冬の八甲田登山

上北鉦山は、八甲田連峰の裏側に位置しており、雪面の硬さが、足がずぼっと入らない程度になる3月中旬から4月にかけて歩けるようになります。

工作（施設課）の工藤さんというベテランをリーダーにして、2回冬の八甲田登山に挑みました。1回目は酸ヶ湯（八甲田山中にある有名な温泉）まであと一息という所で吹雪に遭い、断念して退却しました。確かあくる年と思いますが、採鉦課の同じ面々で再度決行しました。

田代代にあったダムの監視小屋に前夜から泊まり込み、翌日早く出発、登りの山道は慣れないシールをスキー板につけて、ひたすら前の人の後を追うという運動の連続でした。当日は天気も良く、酸ヶ湯温泉到着まで4時間くらいかかったと思います。

一泊して翌日下山。コースには目印があり、それを目指して上り下りを続けました。もちろんスキーの練習もみっちり行いました。特に橋口課長、宗田係長は大変な努力をされ、こうして、全員念願の冬の八甲田登山に成功しました。

# 上北鉱山の思い出

山田 幸男

## 1 はじめに

私が採用通知を受けて、上北鉱山へ入山したのは、昭和 32 年 3 月春分の頃でした。春分明けに鉱山の総合事務所 2 階会議室に集合しました。総勢 20 名を見て予想以上多勢だったので驚きました。内 7 名は鉱山従業員の子弟で、13 名は外部からの採用者という。

その日から月末までの 1 週間、生活、業務、保安関係の教育を受けました(余談になるが翌年以降の採用者は多くても数名だったと思う)。

4 月 1 日は大変よい天気で心地良い初出勤となり、探査に配属した猪股君と担任に連れられ、総合事務所と試錐見張に入社のご挨拶に廻った。総合事務所の 2 階の探査課に落ち着き、探査課長以下 7 名課員に改めてご挨拶が済むと、誰かが「山田の名が 2 人になったのでどうするか？」と声を出した。すると誰か、「今日来た山田君は『幸男君』だな」と云って、決まった。

探査課では田代隧道の貫通の話題が出て、2 人現状を調査に行くことになった。「幸男君も行ってこい」との命令があり、早速頂いたばかりの調査用具を身に付け、最初の勤務に付いた。

鉱山には活気がみなぎっている。事務所を出ると、鉄索の勢いのある音、選鉱場破碎機のリズミカルな強い音、その先

に進むと、エアーコンプレッサーが、「ノン・ノン・ノン・ノン」と心臓の鼓動のような音が休む事なく続く、まさに鉱山の心臓である。

いろいろ説明を聞いて来たが、前方に隧道口が見えて来た。まだ貫通したばかりで、作業員達が忙しそうに隧道口を出入りしている。この辺りの雪は多いようだ。鉱山の深い雪の下から何が現れるか、春が待ち遠しい。

話は変わり、鉱山外部からの 13 名の住まいは、清交寮に決まりました。当寮に入ってから 2 週間位過ぎた頃、とても良い話が伝わって来ました。それは今で云う「GWウイーク」に弘前城の観桜会に行こうと云うことです。しかも早朝に出て、鉄索の下の硬雪の上を歩き、滝沢の屈曲所から貸し切りバスで弘前公園まで行く。これが見事に実現したのです。

## 2 紫雲寮での私の出来事

我等 13 名は 6 か月間清交寮にお世話になり、10 月の第一日曜日に紫雲寮へ移転しました。部屋は 8 畳間 1 部屋 2 名で総勢 70 数名と云う。

翌 33 年、34 年は採用者数名で、34 年の後半頃から、石油、工場、他鉱山への転出で、1 人部屋が多くなりました。当然家具等を入れる者、立派なステレオを入れる者も出てきました。

私も 1 人部屋になり、ステレオを望んだが、立派な物は無理なので、ステレオ・キッドにし、資料を取り寄せて調べる



と、精々ミニチュア真空管 4 球のステレオ・キッドが身の程に合っているようでした。

早速取り寄せて箱から出してみた。ラジオと思われる部品 2 組、レコード回転機 1 台、スピーカー大・小各 2 個、スピーカーボックス 2 組、組立道具一式で部屋がいっぱいになった。「さて組み立てだ」。手解き出来る者が 1 人居た。紫雲寮後輩の小山田君に相談すると喜んで応じてくれた。

最初は図面の見方(図面の部品印や記号、配線記号等々)、ハンダの使い方、配線の使い方等々、お手本を見せる立派な手解さだった。

それでも 1 台目のラジオの組立に 3~4 か月かかった。これで、スピーカー1 組とレコード回転機があれば、取り敢えずラジオ放送とレコードは聞ける状態になった。

ここで、ハタと気付いた。組み立てたこれらの固体を載せる台が必要だ。

幸い、紫雲寮の近くにある調度課に交渉し、伝票手続きにて材料を入手し、日曜大工で作ることとした。これも完成には 3 か月余を要している。

このままでは、未完成ステレオだが、その後他鉱山への長期出張調査に行った事にもよるが、3 か月程手付かずの状態になった。

このころは紫雲寮入寮者もより少なくなり、全部 1 人部屋になったと思う。独身者では、いつしか私が年頭になっているようで、「山田さんじゃない、邪魔田さんだ」と云われ

るようになった。

寮の幹事達は私に3階の1部屋を与えてくれた。入寮以来私の2回目の部屋となる。この部屋は、冬季でも窓が雪に覆われる事がない、3階の東側に並ぶ3部屋の一つで、出入口の正面が階段の降り口になっているが、以前の廊下より、人通りが少なく遙かに静かである。

この時点で、後にこの階段で起きる出来事に遭遇することを、私が知る由もない。

未完成ステレオのまま、この部屋で昭和36年の新年を迎え、今春中に完成させる事を心に誓っていた。春が過ぎればキャンピング調査が多くなる。その前に完成させなきや。

正月気分が解けて、部屋の3分の1に新聞紙を敷き詰め、残るもう1台のラジオ部品を新聞紙上に広げた。小山田君は疾うに転出、頼るのは己のみ、寸暇を惜しんで組み立てる。僅かずつだが進んでいるのが見えて来る。

時の進みは速く、今日は春分の祭日、窓の外は晴天で良い日和、常なら中の沢のスキー場へ行くところ、今日は早朝から新聞紙に“あぐら”をかき、時を忘れて夢中で銅線を切っては、部品とハンダ接続を進めていた。

その時ドアのノックがあり、寮母さんがドアを開け「山田さん何をしているの、10時を過ぎているのに、朝食を取っていないじゃないの」、「もう10時か、まあ一寸入ってこれを見て御覧」、寮母さんは「大分出来上がっているね」「お茶が無いので、軽くお湯割り焼酎を飲みましょう」と誘い、数

分で造り、二つの湯飲みを出し、先に寮母さんが一口飲んで首をかしげ、「この焼酎少しおかしいね、頭が痛くなる、これ飲まずに帰る、早く食べに来なさいよ」と言って帰った。

私は焼酎を2・3口のみ、トイレを済ませて食事に行こうと思い、“ちり紙”を数枚鷲づかみにして、ドアを開けて出て、後手でドアを閉めた瞬間、私の意識喪失が起こり、廊下の板に崩れ落ちた。落ちてすぐ意識が回復し、無様な己の姿に慌てて這いながら“ちり紙”を集め、他人に見られぬようすぐ階段の降り口に立った。その瞬間またも意識喪失、十数段の階段を無意識で踊り場まで転げ落ちた。又すぐ意識回復する。己の姿も行為も先程と同じ行動して、踊り場から2階への降り口に立つと、またまた3度目の意識喪失となって2階の床板に転げ落ちた。

さすがに今度は立つ力はあっても、立つ気にはならなかった。15秒程そのまましていると、近くの部屋から3人出てきて「山田さんどうした？」と声を掛けて来た。私を抱え起こし、“ちり紙”も集めてくれた。「僅か焼酎を飲んだんだ」、「焼酎に腰を取られたな」、まさかと思っていた。3人で40m程の廊下をトイレまで、私を連れて行き「大丈夫か」と云いながら、トイレのドアを開けて中へ入れてくれた。とても有り難く思った。

私はトイレの中で考えた。焼酎に腰を取られることは考えられない。どうも寮母さんの頭痛と、私の意識喪失に関係があるように思われる。とは、“炭火による一酸化炭素か?”、

瞬間に、私の背筋に冷水をかけられたような思いだった。もし寮母さんが訪ねてくれなかったら？

私は部屋の前に戻り、着ているジャンパーを脱ぎ、ドアを勢いよく開け、ジャンパーを振り回しながら、部屋を通り窓を開けたまま、食事を取りに行った。

朝食はお彼岸の牡丹餅だった。ステレオは4月末に完成しました。

## 編集後記

上北鉱山の思い出文集を作ろうという話は、確か「第1回上北鉱山の会」が終わった頃に出て来た。その後今日まで実現しなかったのは、第一に費用の問題であった。

平成27年「第6回上北鉱山の会」開催案内で、文集制作のアンケートを行ったところ、二十数人の方から「寄稿してもよい」との回答があった。

並行して冊子制作の経験を持つ数人のメンバーが、安価に仕上げる方法について調べた結果、なんとか実現できる目途が立った。つまり数人がPCを駆使して本の形にまとめ、印刷・製本のみを印刷所に依頼する方法である。一番難しい最後のまとめを杉山一男氏が引き受けてくれた。

同氏の努力によってこの冊子が完成したと申して過言ではない。JX金属には、事業の変遷の項についてのアドバイスなどのほか種々お世話になった。感謝申し上げる。

**編集委員会**（掛川周男、白根澤亘、杉山一男、佐藤宏司記）

文集「上北鉦山の思い出」2016年（平成28年）1月刊行  
編集委員会事務局

〒274-0806 千葉県船橋市二和西1丁目8-4-305

佐藤 宏司 TEL : fax 047-448-5056

印刷 (有) 遠藤印刷 (東京都千代田区飯田橋)